
daily life

深弦離羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

d a i l y l i f e

【Nコード】

N 5 8 8 4 G

【作者名】

深弦離羽

【あらすじ】

ある出来事をきっかけに探偵を始めた皆代心。たまにくるニュースや新聞にも載らないであろう事件や依頼を、局長である法月華湊と2人でこなしていく。

エピソード1「絆」

▼1

あなたは『探偵』という職業をご存知だろうか。ドラマやアニメ、小説などでよく見かける職業、ということで見かけることが多いと思う。しかし、実際の探偵の職業なんて、そんな夢のような職業じゃない。

殺人事件の謎を簡単に解いてしまうような、少年探偵。

難解なトリックを意とも簡単に解いてしまう外国人。

こんな人物達が実際にいたと考えると、日本や外国なんて殺人だらけになってしまう。ニュースだって、殺人事件で埋め尽くされてしまうだろう。

浮気調査や、人探し。実際に殺人事件を操作するなんてありやしない。しかも、小さな探偵事務所なんていったら、仕事さえ来るのもたまにあればいいほう。

そんな小さな探偵事務所『ほうげつかたんていじむしょ法月華探偵事務所』。ここに持ち込まれた、問題——事件というほど大きな仕事なんて請けることもない——を捜査ファイルと大げさなものではないが、まとめようと思う。そうでもないと、”所長”に怒られてしまうからな。

”絆”

聞いたことがある人は多いだろうが、意味を答えられる人はいるだろうか。

——家族・友人などの結びつきを、離れがたくつなぎとめているもの。——

言葉にすれば、こんな一文で終わってしまうような意味を持って

いる。こう考えれば言葉という物は、非常に便利なものなのだということが分かる。

話が反れた。

絆といっても、全てをまとめる事が出来ないのが”人”というもの。きっかけが簡単なものであっても、時間をかけて培ったものであってもだ。しかも、それが物を通じて繋がっていることもある。それがどんな物でも。

「盗まれた下着を……探して欲しいんです」

それがこの台詞にある女性用の下着……だとしてもだ。

だが、この一言でせつかく久々の仕事ではりきっていた所長殿も、目を点にしたのは言うまでもない。というか、誰がこの台詞を聞けば驚くを通り過ぎて、あっけに取られてしまうのではないだろうか。

「下着って、警察に届ければいいんじゃないんですか？」

一応俺は、当たり前前のことを切り出してみる。依頼人の女性は、少しうつむきながらどういっていいのかわかっているようだった。

探偵に頼むくらいなのだから、警察に届けられない理由というものがあろうが、探偵が盗まれた下着を探すことになるなんて、聞いたことがない。

下着泥棒はテレビを見ていると、たまにニュースで取り上げられている場合がある。あんなふうテレビで自分の下着を晒すのは嫌なのだろうか。もし自分の——といっても俺は男なので、そんなことはありえないのだが——下着がテレビで出てきたらと思うと……。匿名なんだし、気にはならないな。

というより、最初に話を戻そう。そうだな、依頼人が来る少し前に。

この日もいつもの通り仕事はないだろうと踏んでいた俺は、事務所のソファに座りながら、最近買った携帯ゲームで遊んでいた。

現代の文明っていうのは、非常にすごいとしかいいようがない。昔のゲーム機なんて、ポリゴンにしたって、カクカクしてたし、人なんてもってのほかだ。しかも、3Dなんてものがなかった時代もあったもんだ。文明の進化というのは、しつこいようだが、すごい。

「暇よ。暇すぎるわ」

所長席に座っている”自称所長兼電話番号兼マスコット兼助手”の法月華湊は学校が終わってすぐに事務所に来たため、制服のままだったりする。いまどきの女子高生というのはなんだ、いつでもどこでも制服ではないといけないのか。とか外を歩いているときやそこにいる所長殿を見て思ってしまうが、思うだけにしておこう。

「暇よ。暇すぎるわ」

同じ事を2度言い出す。

これは何か言って欲しいときのサインだったりする。というか、分かりやすいサインだと、今更ながら思う。このまま放置しておくとか小さな身体の何処にそんな力があるのかと思うほどの力で、チョークスリーパーを食らいかねないので、なんとなくでいいので返すのが、所長殿との関係を面倒にしないコツである。

「探偵業が暇なのはいいことだろ」

「そうだけどね。でも、仕事がないと生計も立たないのも事実なのよ」

そう言われてしまえば返す言葉がない。

元々は湊の父親がやっていた探偵事務所だったのだが、とある事情で父親が失踪してしまっただがために、収入がなくなり、生計も立てられなくなった。湊の母親は仕事をしているが、俺という居候がいるため、3人養っていることになる。非常に心苦しい。

湊の父親が残したのは、自宅と一体になっている事務所だけ。そこに俺が湊から誘われたのだが、それはまた別の話になる。

「心が、来た仕事をきちんとこなしてくれるから、ある程度は収入もあるけど」

「先月は収入はいくらだったんだ」

「浮気調査が2件で、10万。管理費もろろ引いたら、こっちの収入は5万くらいね」

所長デスクに置いてある電卓をタカタカ押しながら答える所長殿。月に2件くればいいほうじゃないか。とはあえて突っ込まない。下手をすれば月に1件も仕事がないのなんて、ざらにある。というか、1度の調査料が安いんじゃないか？　というのはこの際言わないでおこう。

せっかく綺麗にポニーテールしてある髪を、頭をわしゃわしゃとかくことによって多少乱れ始める。少しは女の子なんだから髪型とかを気にしようとは思わんのかね。

「今年なんて、まだ1件もきてないじゃない。今年度から考えても合計で4件よ？　あゝもう！　どうすればいいのよ！」

「どうしようもなかるうに。こんな小さな探偵事務所なんだから」

「あんたが、少しは広めようとか思ってくれればいいのよ！　なんでもいつもあなたはそう……」

——ピンポン——

所長殿の女子高生とは思えない小言が始まると思った瞬間にインターホンが鳴る。正直助かった。たまに言い過ぎてしまう自分の癖をどうにかしたほうが良さそうだな。気をつけよう。

「はゝい、今出ます！」

どう聞いてもさっき、俺と話していた声色と違うじゃないか。まあ、今月初の仕事になるかもしれないのだから、仕方の無いことなのかもしれないが。

湊と一緒に来たのは、20代前半に見える女性だった。セミロングのストレートの髪型に、柔らかそうな生地 of 長袖のシャツに、下はデニムか——白いブラウスっていうのか？　あれは——。それに、プラスチックのスケルトンのケース。中には数冊の本とノートが入っている。

大学生か、それとも院生か。どっちにしても話を聞かなければ始まらない。

「どうぞ、おかけください」

「は、はい。ありがとうございます」

女性は、俺の前にあるソファに座った。湊はお茶の用意をしにいったようで、すでにその場からいなくなっていた。何でこう気の回る人間であるのに……。

相変わらずこういう場所にくる人というのは、さえない顔をしているものだ。悩みを抱えているのに明るくこられても、それはそれで嫌なものなのだが。

「さて……依頼でこの事務所にきたのですか？」

「そうです。近くにあるって聞いたものだから、小さいところならそこまでお金かからないかな……と」

随分素直に金銭面のことを切り出すな。まあ、事実ここは調査料安いから言い返すこともないのだが。

「でも、安いつてことは……」

「いえ、調査料が安いのは、所長の意向であって、手抜きをしたり、結果を出さないようにしない。というのはありませんので、ご安心を」

その言葉を聞いて安心したのか、先ほどのこわばった顔が多少は和らいだようだ。

「紹介がまだでしたね。俺は皆代心みなしろしんです」

形に拘る所長のせいで、名刺まできちんと作ってある。この職業を始めた翌日には出来てる言う手際の良さには驚いたが。ちなみに、名刺はシンプルに事務所の名前、住所、自分の役職、名前が入っている。ちなみのちなみだが、湊の役職はとんでもないことになっている——所長兼電話番号兼マスコット兼助手が本当に書いてあるからだ——。

「法月華探偵事務所……」

「弁護士事務所のようにですけどね、名前だけみると」

「ふふ、確かにそうですね」

なんでこの掴みは毎度成功するのか。

「はい、お茶です」

「あ、すみません」

「心はこっち」

俺の前に置かれたのは、透明に透き通った液体だった。科学記号で表せば、H₂O。というか、水。酷くないか、扱いが。確かにコーヒーにしてくれと文句言った日から水だった気がする。

「妹さんですか？」

「いや……」

「あたしはこういうものです♪」

俺の隣のソファにお茶を出してから座っていた、湊が猫なで声で名刺を渡すと、依頼人は驚いたような顔をしている。そらそうだ、『法月華』の名前を持っている所長自身が、お茶を出している女子高生なのだから。それに、その名刺の役職も驚く要因だろうな。

「仕事は俺がこなすので、安心してください。とりあえず、あなたのことを聞いてもいいですか？」

「えーと、有馬悠樹ありまゆうきです。大学4年です。一浪してて、それプラス留年してるので、年は24歳です」

「ありがとうございます。では、依頼内容をお願いします」

そして……最初のあの台詞になるわけだ。さてさて、この依頼どうなるんだろうな。と言っても、うちの所長のことだから断るわけもないのは分かりきっているのだが。

しかし、探してくれと言われた女性用の下着がとんでもないところで繋がっている、違うな。理由が隠されているなんて、俺にも湊にも分かるはずもなかった。いや、湊にはその依頼主の気持ちがかかるのかもしれない。……けして女性用の下着だからとかそういう理由ではないのだけは先に使えておこう。

依頼者に、さっそく調査を始める旨を話し、俺は外に出てきた。

湊は依頼者と一緒に、盗まれたという現場に向かっていた。現場と言っても、盗まれたのは依頼者宅の自室のベランダだと話していたから、何かが見つかることはないと思うんだがな。

それにしても、湊のあの格好はなんだったんだろうか。

そのまま制服で行っても良いとは思うんだが……何故かフリフリのレースがついた服を着てきて、髪をポニーテールからサイドに縛るツインテールにしていた。本人曰く、あのような少し年齢が低く見える服を着て、礼儀正しくすれば、その家の親には良い目で見られるようになる、らしい。そういう知恵はいつたいどこで入れてくるのか……。まあ、湊自身が探偵の娘だし、そういう知恵も多少入っているのかもしれない。

などと考えていると、目的地に到着する。依頼を受けると必ずとあっていいほど、ここに来る。

『喫茶 ジョンボリー』。名前のセンスは気にしたら絶対に負けだと思う。しかし、このマスターとこの探偵業を始めたときに知り合った。それから、何か依頼を受けるたびに来るようになった。

カランカランと、古めかしい鈴の音を鳴らしながら中へ入っていく。

「いらっしやい。おや、1年振りだね」

「……1ヶ月振りくらいなんですが」

カウンター席に座ると、1ヶ月前よりも髭が伸びたマスターが迎えてくれる。

「で、今回も依頼かい？」

「そうですね。あ、キリマンジャロで」

「はい、かしこまりました」

相変わらず客が少ない。というか、俺しかない。相変わらずどうやって生計を立てているのか分からない喫茶店だな。

「最近、下着ドロとかありましたかね？」

「新聞取ってないのかい？」

「いや、基本的に小さい事件……大きいも小さいもないでしょうけど、新聞には取り上げられてなかったりしますしね」

「そうだねえ……確か、ここ最近下着ドロがあったという話しは聞いているよ。ちょっと待ってて、電話してみるから」

そういうとマスターは電話を掛け始める。元々このマスターは、刑事をやっていたのだが、上層部といざこざを起こして辞めてしまったらしい。湊の父親とも知り合いだったらしく、警察と情報を交換しながらやっていた、と湊から聞いたこともある。

「今から来るってさ。しかし、君も人使い荒いよね」

マスターは笑いながらそういうが、基本的に呼び出してるのはあなたじゃないのか、という言葉はここで言わずに止めておく。

「それにしても、もう3年かい？ 君と出会ってから」

マスターはコーヒーを俺の前へ出しながら、昔話を始めるつもりらしい。

「そうですね……あの時は湊に無理矢理つれてこられましたけど」

「はっはっは、湊嬢は龍彦さん譲りの元気さだからね。君をつれてきたのも、今だったらなんとなく分かるよ」

「そうですね？ 話を聞いていると、俺と湊の父親は似ているところが一切ない気がするんですけど」

「いや、似てるとか、似ていないとかじゃなくて、そうだね……湊嬢の言うことを否定できないところかな？」

冗談なのか、本気なのか分からないが、マスターは笑いながら話している。否定できないのではない、否定はしているが了承してくれない。という方が正しい。

タバコに俺が火をつけると、マスターはまた俺の表情を見て少し笑う。

「否定しないんだね。それとも……いや、やめておこう。君をいじめるのは」

「そうしてやってください」

カランカランと、音が聞こえると、そのお客は俺の席の隣へと腰をかける。

「全くさ……先輩をいたわろうとかお前にはないのかね」

「ないですね」

マスターの電話で現れたのは、マスターの刑事時代の部下兼俺の高校時代の先輩である、佐伯隆^{さえきたかし}さんだ。先輩と言っても、俺が探偵業を始めたばかりのときにたまたま出会って、そこから関係があるだけであって、俺が高校時代にはすでに卒業していたりする。

「下着ドロだっけ？ 確かにあったが、犯人は捕まってるぞ」

「その下着の中にこういう下着がありましたか？」

俺は依頼者が書いてくれた、女性用の下着を見せる。

「いやあ……流石にもう分からないな。押収はしたが、基本的にはそこまで凝視するようなものでもないしな。犯人が捕まれば、押収品はそこまで重要なものでもないし、流石に盗まれた本人に返すケースの方が少ないからな」

「なるほど。まあ、そりゃそうですね」

「というか、普通の下着ドロのホシがこんな下着取ると思えんだがな……」

「そうかい？ そういう性癖なら盗む可能性もあるんじゃないか？
そういう議論が出るのも分からなくもない。なんていっても、被害者が書いた盗まれた下着は、幼児がはくような下着だからだ。白くて尻の部分には、何故かイチゴ。こう小学生がスカートめくりをしたときに

「やーい！ イチゴのパンツー！！」とか、あんな感じのリアクションが出そうな。

「とりあえず、もう少し調査してみます。佐伯さん、一応絵渡ししますから調べてみてください」

「了解、分かったよ。探し終わったら一応お前さんに連絡する」

「はい、お願いします」

「どうだい、隆も何か飲むかい？」

「じゃあ、俺はアメリカンを……」

時計を見ると、もう19時を差していた。17時に事務所を出たから、2時間経ったのか。さて、依頼者の家に向かった湊はどうなっていることやら。

心と別れて依頼者の家に向かったあたしは、その道中依頼者の悠樹さんと話しながら向かうことにした。その中でも多少情報が取ればいいかな、なんて思ったからだ。

「悠樹さんは大学生なんですよね？」

「うん、そうだよ。知ってるかなあ、聖大行ってるんだけど」

「え!？」

”聖大”といわれて驚いてしまった。あたしが行っている高校が

せいりようかじよしがくえん

”聖稜華女子学園”で、そのまま卒業すると、エスカレーター式で

行けるのが、聖大といわれる”聖稜華大学”なのだ。

「どうしたの？」

「いえ、もしかして、聖女の出身ですか？」

「あははっ、流石にお嬢様学校って言われる場所には言っていないよ。見た感じお嬢様って感じが私にはしないじゃない」

女の子の私が見ても、可愛いって思ってしまう笑顔を見せながら、悠樹さんは笑っている。留年とか浪人してたって言っただけど、24歳には全然見えないほど可愛い。何か負けた気がしてならない。

「湊ちゃんは、聖女なの？」

「はい、一応そうです」

「一応って面白いね。聖女って聞いちゃうと、やっぱりお嬢様って感じがするけど……」

「いえ、あたしもそんな風じゃないですよ。どっちかというと家はお金ないほうですから」

「ふふっ、何か気が合いそう」

あたしに気を許してくれているようだ。良かった、事務所に来た

ときは随分と深刻な顔をしていたから少し心配だったけど。でも、探して欲しいって言っている以上は、きちんと仕事をこなさないといけない。

「あ、ここだよ私の家」

指を指された方向を見ると、家というよりは少々大きい気がするような豪邸が建っていた。事務所兼自宅のうちも大きいけど……うちと同じくらい大きいってなると、お金持ちなんだろうか。

悠樹さんが先に行きドアを開ける。ドアも何か高級感が溢れる分厚い感じがする。ここでもあたしは負けた……。

「ただいまー」

「おかえりなさい。あら、お友達？」

「あ、法月華湊って言います、悠樹先輩に誘われまして」

「あら、そうだったの。どうぞ上がってくださいな」

「はい、お邪魔します♪」

疲れるわね、この営業テンション。と言っても、こっちの方が回りに受けやすいからしょうがないのだけれど。一応悠樹さんのお母さんには良い印象を与えることが出来たから、怪しまれることもなさそう。

悠樹さんの部屋は、2階に上がって一番奥にあった。中に入ると、女の子の部屋というよりも女性な感じがする部屋。でも、ところどころに可愛い人形が置いてあって、そういうところは女の子っぽいかも。

「久々の休みみたいね、お母さん」

「そうなんですか？」

「お父さんがやってた仕事を引き継いだの。だからあまり家にいることがないのだけれど」

父親がやっていったって、今悠樹さんのお父さんはどうしているのだろう。突っ込んで聞いていいものなのだろうか。

「やっていたというのは、お父さん死んじゃったんだ」

聞く前に言ってくれた。でも、悠樹さんもお父さんがいないんだ。

あたしの場合は死んでいるわけではないのだけれど。

「交通事故で死んじゃってさ……でも、いいの。お父さんからいっぱい大事なものを貰ったから」

そういう悠樹さんだが、やっぱり顔がそこまで明るくならないのは、何故なんだろう。

「もしかして、探して欲しい物って……」

「そう……お父さんから唯一もらった”物”なの。だから探して欲しいくって」

小さい時にもらった下着でも、やっぱりお父さんの形見なんだ。だからこそ、大切なものであって、それを失くして不安になっているんだ。

「湊ちゃん大丈夫？」

「え？」

「ずっと、そのネックス握っているから気になっちゃって」

「あ、すいません！」

このネックスは、あたしがお父さんからもらったもの。多分、悠樹さんの話を聞いていて無意識に握っていたんだろう。形見なんて思いたくはないけど、あたしに取っては大切なネックスだ。子供がつけるような安物のネックスでも。

「いいのいいの、大事なものっていうのは分かるから」

悠樹さんが優しい顔を見せている。このネックスがどういうものか悟られているかのようだ。

「は、はい。あ、じゃあ盗まれた状況聞いてもいいですか？」

「うん、良いよ。えっと、先週……かな」

悠樹さんの話をまとめるところだ。

先週、バッグに入れていてもやっぱり汚れてしまうので、毎週1度は洗濯をするので、乾かすために干していたんだそう。そして、起きると下着がなくなっていた。ということだ。その後、犯人が警察に捕まったと聞いたのだが、その犯人が盗んでいたのは基本的に20代の女性だけだったらしいので、その中にはないだろうと考え

たこのことで、警察に届けることもせずに、あたしたちに依頼をしてきた。

「なるほど……」

あたしは持っていたメモ帳にメモを取ってから悠樹さんの顔を改めて見る。やっぱり、明るい顔をしてはいるが、不安そうな面も見え隠れしている。きっと、どうにか冷静にしようとしているのだろうけれど、完全にはなりきれていないのだろう。

こういう人がいるから助けなければならない。困っている人がいるから、探偵もいるのだから。……探し物をするのは基本的にあんまりないのだけれど。

「ありがとうございます。それじゃあ、戻ってあたしも調査に加わりますので」

「お願いね、もし聞きたいことがあれば大学に思うから」

「分かりました。それでは失礼します」

そう言ってあたしは悠樹さんの部屋を後にした。玄関まで送るといわれたのだが、少しの間でも、人に気遣いをさせないようと思ったからだ。話してて、気遣いが上手い人なのが分かったけど、こういうときにまでそうだと疲れてしまうのは分かっているから。

悠樹さんのお母さんにも挨拶をして家からお暇した。そして、一応今から帰るということを心に話しておこうということで携帯を取り出す。

「はい、俺」

「今から帰るからね」

「分かった。何か分かったこととかあったか？」

「探し物が大切なものだったこと、経緯とかが聞けたかしら」

「そんなところか……了解。詳しい話は事務所に戻ってからだな」
そういうと、あたしは

「事務所だね」と加えて電話を切った。

もう暗い。あんまり女の子が歩いていいような時間ではないわね。と言っても、護身術は父さんから教わっていたから、多少ならなん

とかなるのだけれど。やっぱり、それもどうかと思うわよね……。
女の子としては。

事務所に着いた俺は、湊と一緒に情報交換をすることにした。

「そうね、もしかしたら盗難されたものにあるかもしれないものね」
隆さんに頼んだことを話すと、湊が答える。元々マスターと知り合いだったり、隆さんのことを知っていたりしたのは、実は湊だったりする。そう、そこで俺は隆さんが同じ高校に通っていたことを知るのだ。

「とりあえず、明日俺は犯人に関して調べてみることにする。と言っても、捕まっているから警察署に行くだけだとは思うが」

「うん、それでいいと思うわ。で、こっちだけれど」

依頼者の有馬 悠樹さんと話をして分かったことを淡々と話す。
その下着は父親からの形見だったこと。下着泥棒が盗んでいたのは基本的に20代の女性のものだったということ。

それを話している湊の顔が少し、悲しげだったことはあえて触れないでおこう。触れたところで、どうせ所長殿は強がるに決まっているからだ。

「なるほどね……」

「確かにそんな状態じゃ見つからないかもって思うわよね」

「普通ならな。だからこそ、俺らに依頼を持ってきたんだろうよ」

「そうよね……」

話し終わって、悲しい顔を見せなくなったと思ったら、また悲しそうな顔をする。何だかんだ言っても年頃の女の子なんだ。似てる状況で感情的にならない高校生のほうがおかしいだろう。

「夕飯できたわよお」

下から聞こえてくるのは、湊の母親である法月華美奈さん^{ほうげつかみな}。

綺麗で、スタイル抜群で、優しくて、おっとりしてて……と、いいところを上げれば上がり続けるであろう人間だ。

しかも家事料理も完璧。

仕事がない日はこうやって夕食をつくってくれるのだ。

しかし、見た目はどうみても20代後半にしか見えないのだが、高校2年生の湊がいるということは、16歳で産んでいたとしても30代になっている。絶対解けない謎の一つだろう。というか助手が美奈さんのほうがやる気が出るんじゃないか。普通は綺麗で妖艶な助手というのが探偵にはお決まりじゃないのか——ホームズはワトソンだから男だが。

「何よ、あたしの顔に何かついてる？」

黙ってれば娘も可愛いほうなのだろうが……。口がこうじゃな。

「いいや、今の服も髪型も似合ってるって思ってたただけだ」

「な！？　な、ななな何言ってるのよ！？」

不意にこういう台詞を投げかけると、湊は凄い動揺し始める。いやあ、いいね、若いって。——全然関係ないと思うが。

「ほれ、夕飯にいくぞ」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよお！！」

たまにはこうやって苛めてやらんと、いつもやられている俺だからな。たまにの仕返しならきつと大丈夫だろう。とは言っても本音を言ったら許してくれないだろうな。

▼3

「……くん。……きて、心くん」

寝てるところに声が聞こえる。それに加えて甘ったるい匂い。匂いで判断するなんて変態のようだが、なんとなく誰か分かった。

「ん……」

目を開けると、美奈さんが目の前にいた。若干顔の位置が近い気もしなくもないが。

俺が寝室と使っているのは、元々は事務所で書斎となっていた部

屋にベッドなどを持ち込み、そこへ俺の荷物を詰め込んだ形になっている。流石に居候の身であるから一応部屋きれいにはしてる。

「今何時ですか……」

どうも頭が働かない。それでも仕事のときは必ず8時には起きるようになっているのだが、今日は目覚ましが鳴った気配がない。どうもいくつになっても朝はどうも弱い。学生時代何度遅刻したことか。「えっと、今7時ねえ。……ちょっとお願いしたいことがあるんだけれど……」

何だ、かしこまって言うことなんだろうか。というより、起きたてなので、基本的に生返事しかない俺。

「はい……何でもしますよ」

今日は仕事なのだろう。いつもはウェーブのロングヘアを束ねたりしていないのだが、後ろで縛っている。目を擦りながら、美奈さんの顔を見るとなんか紅潮しているようだ。そのせいか、色っぽい顔してる。これで落ちない男はいないだろう。

「出かける前に心くんの……入れてほしいのお……」

健全なる男にその台詞はいかななものか。しかし、ここへ来たばかりの俺だったら反応してただろうが、流石に今は理由がわかる。ただの意地悪だ。

「……何を入れたらいいんですか？」

「ぶう、つまらないわねえ」

いい年こいて、拗ねないでくれ。

「今日天気予報見てたら、雨が降るかもしれないって言ったのよお。だから出かけるときに怪しそうだったら洗濯物を自分の部屋に持ってきておいてね」

「はい、了解です」

「うふふ。じゃあ、お願いね」

何が

「うふふ」なんですか。と思ったが、聞き返してもはぐらかされるのは分かっているので聞かないことにする。それよりも、湊に頼ん

でもいいんじゃないかとは思ったが、自分の洗濯物くらい自分で入れるでしょう。

洗濯物を言われた通り取り込み、着替えて今日もジョンボリーへと向かう。雨が降ると聞いていたが、傘を持つのが億劫なので持っていない。

段々上着がいらないう時期になってきたな。雨が降り続く日が続くのは嫌いじゃないが、仕事となると、雨の中を尾行しなければならなかったりする。意外とそれが寒かったりするし、次の日に体調を崩すこともある。だからと言って仕事を中止出来ない、してはいけない。

不意に携帯のバイブレーションに気付く。名前を確認すると【佐伯 隆】の文字が。何か分かったことがあったのだろうか。

「はい、もしもし」

『すまん、まだ押収品は用意できていない』

開口一番がそれですか。しかし、刑事というのも忙しい職業だ。

そこは文句を言っではいけない。

「じゃあ、何かあったんですか？」

『一応ホシの経歴を話しておこうと思ってな』

元々今日は犯人のことについて調べようと、佐伯さんから聞こうとしていたから調度よかった。にしても、俺に対していちいち隠語を交えて言わなくてもいいんじゃないかと思う。

『名前は、宮田輝彦^{みやたてるひこ}。聖大の3年、21歳だ』

随分若いな。若気の至りと言ったところだろうか。と言っても、俺と大して年の差はないのだけれど。

『捕まったときに否認もしなかったから、すぐに逮捕になった』

「聖大って、聖稜華大学のことですか？」

『そうだな。大学になると共学制になるから、男があそこの大学に行っても問題はない』

「どういう人間なんです？」

『そうだな……一言で言えば、最近の若者だな。犯行理由が魔が差したとかバカらしい理由だった』

「なるほど」

確かに少しおかしいな。20代女性の下着を盗んでいた人間の犯行理由が魔が差したということ。だったら、依頼人の探し物を盗む可能性というのも低く感じる。しかし、そこで考えを止めたら終わってしまう。可能性は全て洗い出していないといけない。

「後でその、宮田に会うことはできますか？」

『留置所に今はいるからな。出来んこともないが……』

その先に見える言葉は分かるが、手続きとかを頼むのに好都合な人はいない。

「よろしく頼みますよ」

『わあったよ！　ったく、仕方ねえなあ……押収品と手続きが済んだらまた電話する』

そういうと電話を切られてしまった。

何処にあるかという問題もまだ解けていないが、誰かという問題も分かっている。実際には、その犯人が盗んでいるかも分からないが、実際に起こっている下着泥棒もそれしかないのも事実だ。しかし、分かっていることも少なすぎる。とりあえず、今は聖大へ向かってみることにしよう。

聖稜華大学。

ここ箕田伊原市では一番大きな建物と言ってもおかしくはない。

箕田伊原市は元々都心から離れているため緑も多く、静かな場所だ。とは言っても、都心へ向かうには電車で1本で行ける為、聖稜華大学へ来るのも苦ではない。幼稚園から大学まではエスカレーター式で上がれるが、各学校は裕福な家庭には人気があるため、小学校、中学校、高校からと、入ってくる生徒も少なくはない。小学校から高校までは女学校であり、大学から共学になる。――湊も聖稜華女

学園に通っているが、学校ではどういう感じになるのだろうか。

大学には色々な人が集まるために、基本的に誰が入っていても分からないというが本当のようだ。何食わぬ顔で入っていったが、警備員がいるわけでもないから特に入るだけなら問題はない。確かに重要な部屋には監視カメラなどがついているのだろうか、そこには用事はないからな。

とりあえず、依頼人に会わないとどうしようもないな。俺は携帯を取り出し、教えられた連絡先へ電話をかける。

『はい、もしもし』

「探偵の皆代です」

『あ、どうしたんですか？』

「今聖大に来てるのですが、少し話が聞けないかなと思ったんですが……大丈夫ですか？」

『はい、大丈夫です。調度今昼食食べ終わったところだったんで。

じゃあ……食堂分かります？』

ここまで来る途中に地図があったはずだな。地図を見れば迷うこともないだろう。

「地図があったようですし、大丈夫です」

『それじゃあ、そこで待ってますね』

誰かと今いるのだろうか。心なしか、昨日話したときより声が高くなっている。誰にも悟られずにするためだろう。

食堂は、入り口から真っ直ぐ進んだ俺がいた中庭のようなところから東の方へ行ったところへあった。少し講義棟より遠く、食事を取るには静かな場所に位置している。周りを見渡すと木々があり、郊外にある高級レストランのようだ。どうも金持ちの考えていることとは分らない。

中へ入ると、大きな食堂がある。左右を見渡すと自動販売機が3台あり、紙容器に入ったもの、缶のものがある。そんな種類があったところでどうしたいのか良くわからない。俺が行っていた高校に

は紙容器の飲み物が入っている自動販売機しかなかった記憶がある。
「あ、こっちです!」

食堂から声が聞こえる。昼時を少しすぎた時間のためか、学生の数も疎らだ。そのせいか、有馬さんがひととき目立って見える。いや、そういうオーラがあるからなのだろうか。流石に俺はそういうカウンセラーじゃないので分らないが。

「すみません、突然呼び出してしまって」

「いえ、私が依頼したことですからきちんと協力しないと。それで聞きたいことって何ですか?」

「はい、宮田輝彦について調べています」

「宮田さんですか」

「ええ、ご存じないですか?」

「そうですね……」

有馬さんは思い出しているのか、うーんと唸りながら上を向いている。心なしか疎らな学生からこちらを見られている気もしなくもないが、気のせいだろう。

「確か同じ学部には居たと思うんですけど、人が多いですし……」

「そうですね。写真とかあればいいんですけど、事情が事情なんで持っていないんですよ」

「いえいえ、そんなに申し訳なさそうにしないでください!」

何だろう、やっぱり見られてる。特に男子学生どもに。

「……すみません。何かやけに視線感じるんですけど、何なんですか?」

「えっと……多分私がミスコンで優勝したからかと思います」

ミスコンっていうと、よくTVとかで見る、何々大学ミスコンのくみたいな感じだろうか。

「この大学に在学している生徒であれば、そういうのに出れるんですか?」

「みたいです……。本当は同じ学年の友達と2歳も離れているし出たくなかったんですけど、無理矢理出させられちゃって」

有馬さんは苦笑しながら話す。前に話した感じだと、結構前に出てくるタイプなのかと思っていたが、意外と謙虚な部分もあるようだ。

「結構周りから話しかけられたりとかあるんですけど……準ミスコンだった三宅美里さん^{みやけみさと}って人に嫌われちゃったみたいで」

申し訳なさそうな顔をする有馬さん。嫌われたというのは、どういうことなのだろうか。

「何で嫌われたんです？」

「同じ学部で、そこそこ話す仲だったんです。でも元々は、その人がミス聖大になるっていうのが本命だったようで……」

なるほど、妬みか。自分がミス聖大になると思って自信を持っていたところで、突然出場した有馬さんがそこでミス聖大に選ばれてしまった。なんか、在り来たりな妬みだが、ありえない話ではない。結構こういう話というものはあるものだ。特に女性の間では。

「でも、探し物には関係ないだろうし……」

「そうですね」

時間を確認すると、もうそろそろ14時を示そうとしている。

「そろそろ、俺は行こうと思います。ありがとうございます。色々聞けてよかったです」

「いえ、役に立てたなら嬉しいです」

「ええ、大丈夫ですよ。絶対見つけてみせます」

就職していたときに覚えた営業スマイル。

結構依頼者を安心させるのに使えたりする。

有馬さんもそれみて笑い返してくれる。うん、大丈夫だな。結構不安すぎたりするとそれを嫌味に捉えてしまうような人もいるが、ここまで精神的に安定してきていけば何も問題はない。ちなみに、そういうことを教えてくれるのは、カウンセラーになった友人からだったりする。そいつの話はまた今度にしよう。

有馬さんと別れ、中庭へ戻ると携帯の着信メロディーが鳴る。誰からだろうと、ディスプレイを見ると、佐伯さんのようだ。

「用意できました？」

『ああ。押収品と留置所での両方ともな』

「ありがとうございます。それじゃ今から向かいますんで」

『受付の姉ちゃんに……』

「分かってますよ。何か最近優しいですから、受付のお姉さん」

『ったく……人をそういう風に丸め込むのは得意なんだな』

「そりゃ……色々ありましたね。それじゃ後で」

電話を切ると早速、箕田伊原署へと向かうことにする。

箕田伊原駅から徒歩で10分くらいの場所にある、箕田伊原署。

——と言っても、俺の移動手段は原付自転車なんだが。

入り口は警官が忙しく動いている。世間では何かしら事件が起こっているの、しょうがないことなのだろうが、こういうことが無くなるのが一番いいのかもしれない。

警察署内に入ると、毎回いる受付の婦警さんに頭をたれる。婦警さんも俺のほうを見て、微笑んでくれる。軽く恐怖を覚えるな、お姉さんというのは。

特に喋ることなく婦警さんは察してくれたのか、内線で佐伯さんと呼んでくれた。

「原付変なところに止めてないよな？」

「ちゃんと止めてますよ」

佐伯さんが連れて行ってくれたところは、押収室という押収品をしまっておく部屋だった。準備しておいたのか、そこには女性用の下着が広げられている。

「何か、こうあると圧巻ですね」

「100枚以上あるみたいだな。っと、これ返しておくぞ」

佐伯さんに渡しておいた絵を返してもらい、自分の目で確認することを始める。しかし、そこにはないのが分かっているのか、佐伯さんは暇そうに欠伸をしていた。しかし、自分の目で確認しないことにはどうしようもならない。伝えてもらったものが全てではないの

だ。

「ないみたいです」

「ああ、どうせ自分で見るだろうから言わなかったが……よくこうも躊躇無く触れるな」

手袋はしているので、指紋はつくことはないだろう。一体何のことを言っているのか分からない。不思議そうな顔を俺がしていたのか、佐伯さんは言葉をつけたす。

「その……女性の下着にだ」

何言ってるんだ、この人。

「仕事でしょう？ まったく何言ってるんですか。娘さんだってもうすぐ小学校なんですから、自分で洗濯したときに将来困りますよ」

佐伯さんには一人娘がいる。奥さんはいかしの理由で亡くなっってしまったらしく、娘さんと二人暮らしだ。それはいいのだが、たまに娘さんを事務所に預けるのは勘弁して欲しい。

「家事全般は、祐美がやってくれるからなあ……」

もう放っておこう。娘さんのことになるとどうもダメになってしまう。出来る刑事ではなくて、ひとりの父親になってしまう。

「……で、留置場行きたいんですけど」

「あ、ああ……連絡してあるから、俺の名前を出せば入れるはずだ」簡単に挨拶をすると、箕田伊原署を後にする。佐伯さんが一旦あのようになる、戻るまでにきっかけが必要だったりする。まったく……お願いだからもう少しきちんとした先輩を見て見たいもんだ。

警察署の近くにある留置場。佐伯さんの名前を出すと簡単に中に入る事が出来た。

「10分間です」

「分かりました」

10分で色々聞かないといけないわけか。少し短い気もするが、宮田から聞けることも少ないだろう。

扉を開けると、よくドラマで見るようなガラスが間にある部屋。宮田はすでに座っている。その後ろには、それを見守る警察官がひとり。どうにも慣れないな、こういう空間には。

宮田は最近の若者っぽく、明るめの服を着て、首にはチェーンのネックレスをしている。髪は茶色いメッシュが入っており、よくテレビで見るチャライやつのように見えなくもない。

「誰ですか？ あんた」

「探偵の皆代です」

探偵が何の用なんだ、みたいな顔をされるが関係ない。というより、想定内なので、何も言わずに話を進めることにする。

「盗んだ下着にこのようなものはなかったですか？」

有馬さんに書いてもらった絵を見せる。

「なんだ、あんたそういう趣味なのか？」

「……盗んだ下着にこのようなものはなかったですか？」

「……ねえな」

いちいち口答えしてたらキリがないのは分かっている。意外と同じことを繰り返すと、相手側も察してくれる場合のほうが多かったりする。

「なるほど。分かりました」

俺はそれだけ聞くと席を立とうとする。正直それだけ確認できればよかった。後は、宮田自身が身に着けている物。それを見れば大体事情が分かってくる。

「なんだ……それだけなのか？」

「ええ。ないって言うのは分かっています。それに、押収されていないのなら、あなたの部屋にもなかったことになる」

「……」

「あなたがどんな人間か見たかったですよ。意外と良心を持っているようで良かった」

俺は彼が左手につけているものを見ながら答える。彼がこの話を

しているときに、しきりに触っていたからだ。

「ありがとうございます。それでは失礼します」

俺は部屋から出ると、そのまま止めた原付自転車に向かって歩き出す。流石に警察署に止めっぱなしなので、下手すると佐伯さんに何か言われるかもしれない。

全ては繋がったな。いや、繋がったというよりも何処にそれがあ
るのかだけが分からない。後は取り戻すだけなのだが、いったいど
うしたものか。とりあえず明日も有馬さんに話を聞いてみるしかな
いだろう。

一応所長としていたので、湊にも報告がてら連絡を入れることに
する。

『もしもし、どったの？』

「どったの、じゃないだろ……。報告だ報告」

今日行った調査を湊に報告をする。だが、探し物がどこにあるか
が分かっているため、そこまでは話さなくておくことにする。そ
こまで話すと湊が混乱する可能性があるからだ。

『なるほどね……。それで、明日はどうするの？』

「もう一回有馬さんと話しに行こうと思ってる」

『りょーかい。あ、ダメだって！　ちょ、返しなさいよ！』

何やってんだ、この所長殿は。

「んじゃ、今から帰るからな」

そういつて電話を切った。何か嫌な予感がしてならない。すでに
暗くなった道を俺は原付自転車で飛ばすのだった。

しかし、この時点での俺の考えは甘かったのだと、後々知ること
になる。探し物がどこにあるのか、それが何故なくなったのか。実
際はその”何故”が大切だというのに。まだまだ俺は青二才だとい
うことだ。

「あ、おかえりー」

「よう、心」

何でこいつまでいるんだ、杉並優莉。すぎなみゆうり

湊と一緒によくつるんでいる友人のひとりで、たまに事務所に来ては、俺が買ってきたゲームを勝手にやっているという暴挙を働く。

湊と同じ聖女に通う学生だと聞いているが、こいつもこいつでお嬢様だとは思えないような性格をしている。しかし、こいつの家は生粋のお嬢様育ちらしく、親もどこぞの社長をやっているらしい。湊より少し身長が小さく、赤みがかった髪を基本的にサイドでくくっているため、中学生として見えなくはないが、喋ると一人称が

「オレ」であり、男のような口調なので『喋らなければ可愛いだろう人間』の2号である――言わずもかな、1号はもちろん湊だ。

「お前、ADVはミステリーだけでギャルゲーのひとつも持っていないのかよ」

「持ってねえよ、そんなの……」

ゲームソフトをしまっている棚を漁りながら優莉が言い放つ。頼むから整理してるものを汚くしないでくれ。

「ダメね、心。ギャルゲーというものも、結構探偵という仕事に役に立つものよ？ 乙女ゲもしかりよ！」

続いて所長殿が口ぞえをする。いったいこいつらは何がしたいんだ。それにそういうアドベンチャーゲームがどう仕事に役に立ってくれるのか俺が納得するように話してくれ。

全くもってこの2人が揃ってしまおうとどうしようもなくなってしまふ。基本的にTVがあるのが事務所側なため、事務所を占拠されてしまうのだ。やれやれ、たまの平和はジョンボリーでのコーヒークらいなのか、俺は。

▼4

本日は日曜日。有馬さんに話を聞くために原付を飛ばしていた。今日は後ろに重石を乗せながら。

「あ、はい、分かりました。ではそちらに向かいます」

有馬さんと話をするために、運転をしていない湊が連絡をしている。しかし、この依頼のときはそのフリフリの服じゃないといけないのだろうか。風でなびいて、運転している俺には非常に邪魔なんだが。

「今日大学のイベントで、それに出るって話よ」

「それじゃ、大学か」

有馬さんの家までは、聖大までの道のりまで途中まで一緒なので助かるな。俺は大学へと原付を向けて走り出す。

大学にはすでに多くの人で賑わっていた。

湊の話によると、大学のイベントとかになるとミス聖大としてゲスト出演したりするため、こういうイベントに呼ばれることは少なくとも無いそう。だ。いったい何のイベントなのかは分からないが、とりあえず有馬さんのところへ行った方が良さそう。俺の中での嫌な予感はまだ終わっていなかったからか、控え室となっている会議室へと急ぎ足になっていた。

会議室へ入ると、そこには2人。依頼者である有馬さん、そしてもうひとり、少し派手目な服を着た女性がいた。

「どちらさまですか？　ここは控え室なんですけど」

きつつい女だな、初対面の人間に。

「あ、私の知り合いなの。ごめんね」

「じゃあ、早く済ませて。イベントまで時間ないんだから」

もしかして、この人が三宅 美里。有馬さんがミスを取ってから態度が変わったという、その本人か。左手についているのは――。

「何よ、あの女。ムカつくわね」

聞こえるだろ、そこまで広い部屋じゃないんだから。頼むから静かにして欲しいと俺は願う。願うだけだ、言っても聞かないだろうから。

「一応報告しておきます。探し物が見つかりそうです」

「え！　本当ですか！？」

有馬さんが驚いたように大きな声をあげると、三宅 美里がきつい目で睨んでくる。それが分かったのか、有馬さんは申し訳なさそうな顔になり、声を少し小さくする。

「その……何処にあるんですか？」

「何処、というのは実際明確には分かってません。多分この大学にあると思います」

「どうのことよ？ 聞いてないわよ、あたしは」

あからさまに不機嫌な顔になる湊を他所に話を続ける。

「ここまでは分かっているのですけど……大変申し訳ありません。ありそうなところを今日は調べてみたいと思っています」

「あ、はい。多分もう30分後にはイベントに出ちゃうので……ちよっとお手伝いが出来なくなっちゃいますけど、すいません」

「いえ、それは仕方ありません。今日中には見つけだすので、安心してください」

「はい、お願いします」

俺は言うことだけをいうと会議室を後にする。

さて、これからどうしたものか。闇雲に探したところで見つかるはずもないのは分かっている。一番いいのは、探し物を持っている本人がそれを持っていること。だが、流石にその人物のロッカーを勝手にあけるのもできないし、協力も仰げないだろうな。

「大学にもなると、こういうイベントって随分大きなものになるのね」

中庭を歩いているときに、集まっている人を見ながら湊が呟いている。手作りされたステージについている看板を見ると『大学一は誰だ！ 聖大食い大会！』と書いてある。大食い大会なのか、今日は。そのわりには随分と大げさな感じがする。

「知らないの？ 聖大のイベントは、実際に日本中でやっているこういうイベントに引けを取らない規模で行われているのよ。しかも、学生内だけじゃなくて、一般でもこういうイベントであれば出場可能になっているわ。だから聖大生以外の学生とか、も集まってきて

るのよ」

なるほどね。随分と大学側も金を出しているもんだ。下手すりゃ箕田伊原市で一番のイベントになるのか。こういうことに興味がなかった俺には、なんだか新鮮な気持ちになる。

「悠樹さんも大変よね。こういうイベントって基本的にミス聖大への質問とかもあったりするのよ」

「なんだそりゃ。関係ないじゃないか、大食いに」

「そういうことも必要だってことよ、イベントには。例えばそうね……好きなタイプは？ とか代表的じゃない？」

くだらん質問するもんだな。でも、周りから視線を浴びているのを一度実感しているからな。男子学生からやっぱり人気があるのかもしれないな。彼氏がいるかどうかは、流石に仕事に関係ないから聞いてはいないが。

ちよっと待てよ。聖大生以外でも集まり、人も多い。しかも、あの人間が持っている理由。やばいな、少し考えが甘かったみたいだ。「でも、あたしはこういうの興味ないし……」

「不味いぞ、控え室に戻る」

「ちよ、待ちなさいよ！ もうあれから20分経ってるのよ？ 流石に控え室から出てる可能性があるわ！」

湊の静止を無視し、俺は控え室へ走り出した。

今の内に止めておかないと、非常に不味いことになる。というよりも、有馬さんにも持っている人物にもだ。

もう少しで控え室だ。呼びに来たであろう係員をしている学生が見える。間に合ったみたいだ。

「ちよっと、待ってくれ！」

「え……皆代さん、どうしたんですか？」

流石に驚いた顔をしている有馬さん。それもそうだろう、俺は探し物を搜索していると思っっているのだから。

「あんたにも残ってもらいますよ、三宅さん」

「何よ、私は何だって言うの？」

「とりあえず、あんたがポケットに入れているものを出してくれ」
「な、何でよ？ 何の権利があって言ってるのよ！」

うざったいな、こういう女は逆上し始まると止まらない。こっちもまくし立てないとうしろしようもない。

「あんたが持つてるんだろ、有馬さんの下着」

「え……」

「な、何言ってるの？ そんなもの……」

「宮田が話してくれたよ」

さて、どう出てくるか。カマかけて引っかかってくれるとも限らないが、今なら食いついてくる可能性がある。

「く……あいつは最後まで役立たずじゃない！」

「認めましたね」

「あ……」

「ど、どういうことですか皆代さん！ 何で彼女が……」

「下着泥棒だった宮田の話はしましたよね。宮田と三宅は付き合っていたんですよ」

周りの音が聞こえないほどに静かになる。三宅はうつむいたままだ。

そう、宮田がしきりに触っていたのは、左手についた指輪だった。大体こういう若いカップルというのはペアリングとかをつけて喜んでたりするもんだ。だが、さっきまでつけていたリングは三宅の手にはついていない。三宅自身はどう思っているのか分からないが。

「付き合っていた宮田が下着泥棒だった、この事実を知ったときにも思いついたんでしょう。……今でも多少は話すときはありますよね？」

「はい、同じ学部ですし……」

「そのときに常に持ち歩いている話はしました？」

「はい……そんな隠すことでもないのよ」

「その話と、彼氏が下着泥棒だったという事実で出来たことです。宮田に盗ませ、それをこういうイベントを使って有馬さんを辱めよ

うと思っていたのでしょうか」

「ど、どういふことですか？」

「妬んでたんですよ、あなたがミス聖大になったことをね。というか、周りからあからさまに分かっていたようですけど。本命だと言われていたのが、準ミスで終わってしまう。それが屈辱だったんでしょう」

そう、有馬さん本人も気付いていただろう。しかし、それを表で話したくなかった。どうにかして元の関係を取り戻したかったから。有馬さん本人は、嫌われてしまったとしか言わなかったからな。

「盗んだのは宮田かもしれない。でも、宮田はあんたを庇って何もあんたのことを言わなかったよ。俺は宮田と話をしてきたとしか言っただけだ」

「う……」

三宅は手で顔を覆い、そのまま座り込んでしまう。

「なんで……何であんなやつが……」

「あんたは現在どう思っていたかは知らない。でも宮田だけは、ミス聖大はあんただった。ってことだ」

イベントは少し遅れつつはあったが、順調に終わった。三宅は共犯でもないのに、罪に問われることはないだろう。しかし、有馬さんを陥れようとしていたこと。それは決して良いことではない。彼女自身がそれをどう考えていくか。それから先は俺がやることじゃない。探偵がやるのはここまでだ。

「指輪と、下着か」

「ああ。結局はどっちも互いが互いに繋がっていたわけだ」

物がどんなものであっても、相手がどう思っているか、それは結局何かに繋がってくるもの。自分自身が大切にしているのなら、さらにそれを強くするものだ。

湊はうつむきながら、首についているネックレスを見つめている。
「親父さんに貰ったやつか、それ」

「え……そうだけど。だから何よ？」

「いいや、何でもないさ」

俺は曖昧に笑って流そうとした。湊にとって大切なものは、それであって親父さんに繋がっているものなのか。俺にとって大切な物というのは何なんだろう。誰かに繋がるという大切な物。

「ちょっと待ってくださいーい！」

後ろから聞こえる声に反応をして、俺と湊と同時に振り向くと有馬さんが走ってくる。イベントの片付けも少し手伝ってから帰るといわれていたので、後の話は後日ということになっていた。

「どうしたんですか？」

「いえ、一応話しておこうって思いました」

依頼は解決したのに、話しておこうってどういうことなんだろうか。

「あの……実は私、違う探偵事務所に頼もうと思っていたんです。でも、どうしたらいいか分からなくて、父親の知り合いの人に最初相談したんです。そうしたら湊ちゃんのところがいいって推薦してくれて……」

どういうことだ。法月華探偵事務所は正直そこまで、大きな探偵事務所ではない。有名ではないため、依頼も少ない。というのは必然的に起こるわけなんだが。それを知っていて、推薦するということは――。

「悠樹さん！ それってどういう人ですか！？」

湊が突然反応し始める。何となく俺も分かってきた。

「えっと、すらっとしてるけど鍛えているような感じの体つきで……身長も少し大きくて、気さくな感じがするオジサンが近いかな。多分子供がいたら湊ちゃんくらいの子供がいるかもしれないけど……そういう話はしたことがないし」

「その人の連絡先分かりますか！？」

もしかしたら、それが湊の行方不明の父親かもしれないってことか。だが、そんなに簡単に姿を現すものだとも思えないが。

湊は有馬さんに連絡先を聞き、礼を言っている。これで、完全に終わったっぽいな。

「皆代さん」

「はい、なんでしょ？」

「ありがとうございます♪」

随分晴れやかな笑顔を見せてくれるじゃないか。それがミス聖大に選ばれた最高の笑顔というやつなのだろうか。俺は一礼すると、原付が止めてある駐車場へと足を向けた。

「フラグが立ったじゃない」

「何の話をしてるんだ」

もうすぐ太陽が真上にくる季節になる。

これから暑くなるうとしている季節をよそに原付で走っていると気持ちいい風が通り抜けていく。

それを他所に何かを考え込んでいる湊。

さっきの有馬さんから聞いた話だろうか。俺は湊の親父さんに会ったことがないから、それに何て言って良いのかが分からない。だが、会わせられるなら、会わせてあげられることが可能であるなら俺は出来るだけ手伝いをしようと思う。きっと、そのネックレスが湊の親父さんに繋がっているのなら不可能ではない。そう俺は思うからだ。

絆なんて所詮は目に見えないものだ。

自分が気付かないところで繋がっていたり、自分から一方通行であったり、それはそれぞれなのかもしれない。でも、それが良いものであるか、悪いものであるかは、それはやっぱりその人次第だと思は思う。俺もきつとどこかで繋がっている人がいるのかもしれない。それは誰になのかは分からないけどな。

さあ、明日からまた所長のお小言に付き合うとするかな。

エピソード2（繋がり）

▼1

人間関係というのは、難しいものだ。それが同じ家族であっても、友人であっても、仕事場での上司であってもだ。誰にでも踏み入っては欲しくない領域というものが存在する。だから、それを理解するために、コミュニケーションを行いながらそれを量っていく。

一昔前に俺は人間関係について悩んでた時期があった。でも、それはひとりの友人によって助けられたと言っても過言ではない。あのときの俺は誰とも関わりあわなければ、他の人に感情を抱かなくていい、別れがあるから寂しくなるし、悲しくなる。だからひとりでいることを

好んだ。確かに、5年ほど前に起きたとある人の別れのせいだということも分かっている。

だからって、そこで全てを拒んでいては、先には進めないということも分かった。

そう、その友人は俺にとっては命の恩人とは少し違うが、それと同じくらい感謝をしている。

あのときあいつに会わなければ、俺は湊ともこんな風に探偵をしてはいなかっただろう。

今回の依頼は、人間関係によって起こった物なんだろう。しかし、依頼の調査は失敗している。その理由も含め、ここにファイルをまとめる。

もうずいぶん暑くなり、俺はジャケットを脱いでクールビズ姿で事務所で涼しんでいる。あ

んなに暑いのに外に出て行くほうがおかしい。が、それは俺の考えであることであって、我所

長どのの考えではないことはここで言うておく。

「もっと冷房強くしなさいよー」

力のない声が事務所に響く。もう1度いう。さっきのは俺の考えである。

「エコという言葉を知らんのか、お前は」

俺はパソコンに向かいながら答える。いちいちそっちを見ている余裕はない。ネットゲーム

をしているのだから。

「またやってんの？ まったく、ゲームで引きこもってるなんて最低よ」

お前に言われたくない。

とは一切言わないが、無視してゲームを続けている。今やっているゲームは俺が23歳のとき

からやっているゲームで、今でもネットで仲良くなった人たちとたまに遊んでいるものだ。

「まったく、依頼も相変わらず少ないし……暑いしやってられないわ」

独り言しかり、小言が始まった。そんなことをしているくらいなのなら、夏休みである今く

らいは、友達と何かを計画して遊びに行ったらどうなんだ。まったく、女子高生とあろう元氣

の源であろう職業のやつが部屋でこもって暇そうにしてるなんて、あんまり聞いたこともないぞ。

ピンポーン。とふいに聞こえる音。所長殿はその音がなると通常の3倍のスピードで玄関へ

行く。自宅のほうのインターホンが鳴ってもここまで早くはないくせにだ。

「いらっしやいませ〜♪」

探偵事務所なのにどういう迎え方なんだよ。レストランとか、喫茶店とかじゃないんだぞ。

と、パソコンから玄関先へと目を向ける。玄関はここから見えないから声だけが聞こえるのだが。

「あの、心いますか？」

聞いたことがある声が聞こえる。何だろう、あんまり知り合いには俺が探偵になったことを

話してなかったりする。そう考えると伝えた人間に絞られるのも必然なわけで。そうになると、訪ねてきたきたのは、ひとりだろう。そいつだけにはメールで伝えた記憶がある。

「心お客よ」

おいおい、さっきの営業ボイスはどうした。依頼ではないと思っただのか、いつもの湊に戻ったようだ。

「やっほー！ 久しぶり」

目の前に現れたのは、やっぱり予想通りの人間だった。久しぶりとはいっても、ネットゲームではちよくちよく遊んでいる気もする。

彼女は『樺田真美^{かばだまみ}』。人間関係で悩んで俺を助けてくれた本人だ。実際に会うのは1年

振りか。俺が探偵をやって忙しいうから、悪いという理由でネットゲームだけで会っていた。

1年たつてはいるが、真美は何も変わってない。そらそうか、1年で何かが急激に変わることもない。

「どうした、よくここが分かったな」

俺はパソコンデスクから立ち上がり、応接の椅子へと通す。

「え？ 心がメールで場所も教えてくれてたよ？」

笑顔で教えてくれるが、俺も物忘れが悪くなったもんだ。

「んで、今日はどうしたんだ？」

「ちよつと……調べて欲しいことがあるんだ」

飲み物を持ってきた湊の動きが、真美の前に置いた瞬間に止まる。仕事だと分かると動きが

変わるみたいだな。そういうメリハリはいらんと思うが、気にしないでおう。

「調べて欲しいこと……それは依頼とっていいのか？」

「うん」

「とりあえず……受けるかどうかは話を聞いてからでいいな？」

「分かった。……」

基本的には常に笑顔の真美の表情が曇る。昔実際にあったときに何度か見た顔。くそ、胸が苦しくなる。

「元彼が……何を考えているのか調べて欲しい。これが依頼かな」

湊の顔は「何それー」って言いたそうな顔だったが、俺の表情は厳しいものになっていた。

それに加え胸の苦しみが増す。さっきの表情で感じていた嫌な予感が当たった。

「……湊には話したことがなかったな。真美、話しても構わないか？」

「うん、いいよ。探偵事務所の所長さんだもんね」

笑顔に戻っている。何で辛いなら辛そうな顔をしない。昔からそうだ。それを見ていると俺

の胸の苦しみが治らない。きっと真美はそれ以上に辛いのだろうが。湊にどういふことなのか話を始める。

元々真美には彼氏がいた。まだ俺と出会う前だったはずだ。数年付き合っていたが、その関

係も終わる。そこまでは普通のカップルのなり染めになっていまうのだろうが、真美の場合少

し違う。真美は現在でもその元彼のことを想い、何度か元の関係に戻れないかと言っている。

しかし、元彼には現在彼女がおりそういうわけにはいかない。だから諦めようとは思わな

いのが真美だったりするわけだが。真美とその元彼はたまに2人が会いたいときに会っている

そうだ。それが真美にとってどんなに辛いことなのか、そして俺や他の友人にどんなことを言

われてもやめようとしなかった。

「そんなことが……でもそれって、ただ都合の……」

「言わなくていい。そんなことは俺も言ってる」

「うん。ありがとう湊ちゃん」

くそ、何で笑ってるんだよ。

真美と初めて互いのことを話したことを思い出す。あれはネット上ではあったが、真美の辛

みが勝手な自分の想像だとは分かっているでも胸が苦しくなる。それが自分の悪い癖なのは分か

ってはいる。もう見守ろうと決めたのにも関わらずだ。

俺は疑問に思っていることを真美に投げかけることにする。

「その依頼は、俺を友人としてなのか、それとも探偵としてなのか。どう見て依頼している

だ？」

少し戸惑う表情をしているが、明るい表情はそのままだ。

「両方……かな」

両方か。あまり探偵というものが私情を挟んではいけないものなのだが。――あまりという

のは、依頼者との信頼関係もなければいけないからだ。

しかし、普通の探偵へ持ってくる相談とは違う。それを難しい顔

をしている湊が了承してく
れるかどうかが問題だ。

「いいんじゃない。調べてあげなさいよ」

無意識に俺は湊の顔を見ていたのだろう。湊は真美のほうを見なが
らそう答えた。しかし、

ただそれだけで俺がこの依頼を受けても良いものなのだろうか。

「もし、こういう結果になったとしても……この先真美は真美でい
ることができるな？ そし

て、その結果をちゃんと受け止めることができるな？」

無意識に聞いていた。きっと俺が迷っていたのはこういうことだ
ったのだろう。

真美は表情を変えずに「うん」と返す。何だかんだで決めたら聞
かない奴だしな。無駄だと思
は思ったが、それが真美のためになるのなら。

「じゃあ、明日から調査を始める」

「本当に！？ ありがとう！」

そんなに嬉しいことなのだろうか。満面の笑みで感謝の言葉を口
にする。

今日は木曜日。多分日曜までには依頼を遂行することが出来ると
思う。しかし、それがこの
先どういう影響を与えるのか、全てにおいて未知数であることには
違いはない。

俺は日曜には何とかなるだろうということをも真美に告げ、今日は
帰らせることにした。ダメ
だった、あの笑顔を見ただけで胸の苦しみが増してしまう。自分
勝手だとは思いますが、こうす
るしかなかった。

「何怖い顔してんのよ」

「あ……すまない。そんな顔してたか」

真美を玄関まで連れて行った湊が、応接の椅子に座りっぱなしで

いる俺を見ながら、呆れ顔

で言ってくる。だがその顔は少し真面目な顔に戻っていく。

湊は俺の横へ座り、俺のほうを向かずに話しかけてくる。

「ねえ……あの人って心付き合ってたの？」

付き合っていた。確かに嫌いではない。だからといって、それは恋愛感情かと聞かれればき

っぱり違うといえるだろう。なんだろうか、ただ根拠がないがただ付き合いが長くなるだろう

なと感じた数少ない人だった。

「いいや、ただの……友人だよ」

前の俺だったら友人って言葉を人に使っただろうか。なんとなく昔誰とも関わりあいたくな

かったときのことを思い出す。多分、あのときの俺なら「知り合い」だって言うに違いない。

そりゃそうだ、あのときの俺は真美のことなんて何にも知らなかったのだから。

「そっか……。調査頑張ってたね。今回はあんたに任せるから」

湊も気を使ってくれたのか、それを言うと自分の部屋に戻っていた。なんとなく声に元氣

がないのは分かってはいたが、それを気にしている余裕がなかった。

▼2

調査といっても、何故か訪ねて来てもらったときに真美に詳しい話を聞く気になれなかった

俺は、依頼のあった次の日になった今日、実際に真美と友達だというネットゲームの知り合い

に連絡を取る事にした。きちんとそのときに話を聞かなかったってことは、探偵として失格な

んだろうな。

ネット上であつたので、その友人『ミィア』は少し戸惑ってはいたが、俺が探偵で依頼主が

真美であることを伝えると快く承諾してくれた。――『ミィア』と
いうのはハンドルネームで
あるのは説明しなくても分かると思うが。

たまたま朝からログインしてくれて助かった。運が良いとしか
言いようがない。いや、こ

れは結末へと向かわせるための運命なのか。くだらないな、俺が運
命だなんて。

仕事が終わった後でならと、18時半に箕田伊原駅前にある喫茶
店で落ち合うことになった。

時間をもてあました俺はこのままネットゲームを続ける気にはな
れず、喫茶店『ジャンボリ

ー』へ向かうことにした。家にいようが、違う場所でコーヒーを飲
んでいても一緒だとは思
うのだが。

相変わらず空いている。空いているというか、角で今にもぽっく
り逝ってしまいそうなお爺

さんと、今入ってきた俺だけのようだ。

「いらっしゃい。今回は随分早いんだね」

「いや、今回は別に仕事絡みではなくて時間潰しです」

「そうかそうか。何か飲むかい？」

カウンターに座った俺に、無条件で灰皿を出しながら注文を聞い
てくる。俺はいつも通りブ
レンドコーヒーを頼む。

こんなにコーヒーが心に滲むことは今までであつただろうか。起き
てからも多少苦しかった胸

は、少しだけ和らいだ気がした。

「何か、悩んでいるみたいだね」

「え？ いや、そんなことないですよ」

また湊が言っただように怖い顔というのをしていたのだろうか。確かに黙っていると、真美のことを考えてしまう。

見守るとは決めたし、本人に言ったこともある。これは本人の問題だし、結果をもたらすのも真美本人だ。確かに背を押すことは可能だとは思う。だからこそ、この依頼を受けた。もし、今回の結果が真美の何かのきっかけになればいいと思ったからだ。だからといって、本当はただ見守るなんてことはしたくはない。解決に導けるなら本当はそれがいい。いや、どうにかしたいと本気で思っている。だが、どうにも出来ないもの事実だ。「心君、あんまり自分だけで解決しようと思うのはよくない」「え……」

ふいにマスターに言われた言葉に顔をあげる。

自分だけで、か。確かにこれまでの依頼は湊が必ず助手としてついてきてくれた。――学校が休みだったり、終わった後だが――今回は俺だけでやっていい。そう言ったのは湊自身でもあ
るし、それを俺も願っていた。

「その問題は君だけの問題じゃない。もちろんそれは相談をしてきた依頼主のものだけでも、その場にいた湊嬢の問題でもあるんだ。いつも依頼は二人とも把握している形だって言っただけだね？」

「はい、湊は所長という立場ですし」

「多分、今回は心君だけでやれて言ったのだらうけど、湊嬢はきっと依頼主のことを心君が感じてより考えているだらうし、心君を心配しているのだと思う」

マスターは優しく微笑みながら、淡々とカップを拭きながら話す。心配か。昨日の夜からそういうえば口を聞いてない。話すことがないというのもそうだが、多少元気がなさそうにも見えた。

「これから用事があるのかい？」

「はい。依頼主の友人に聞きたいことがあったので」

「それなら、帰った後に湊嬢とも話してみるといいよ。きっと湊嬢は今不安でしょうがないと

思ってくれる」

まったく、この人は仙人か何かなのかね。「ふふふ」と笑っているから余計に何を考えているのか分からない。でも、何だか張っていた緊張が、少しだけ取れた気がした。

18時25分。俺は待ち合わせよりも少し前に駅前の喫茶店へと来ていた。俺がどういう容姿な

のかを伝えてはいるからすぐに分かると思う。すると、ひとりの女性がこちらへ歩いてくる。

「あなたが『インテンス』？」

「はい。じゃあ、あなたが『ミィア』さんですか？」

『インテンス』というのは、俺のゲーム内での名前だ。【意思】という意味がある英語を少し

だけいじっただけなのだが。

真美と同級生って言っていたのを覚えているから、俺よりは年下なのか。ゲーム内では真美

に引けを取らないくらい明るいキャラだからな。テンション負けしないようにしないと。

「あ、いつも通りでいいですよ」

「そう？　じゃあ、いつも通りに」

ミィアさんは俺の対面に座ると、店員を呼んでミルクティーを頼

む。

「それで真美について聞きたいことって何かな？」

「現在の真美と元彼との関係。それと、もし知っているのなら元彼の連絡先などが聞ければいいかな、と思ってます」

少し悩んだ顔をしているが、俺が探偵で依頼主が真美であることも言っているため、すぐに笑顔へと変わる。

「うん、分かった！ 私が役に立つなら。それにしても……」

「なんですか？」

何だろう、やけに俺の顔を見ているが。

「思ったよりカッコいいじゃない、インテンス。喋り方とか結構そのまんまだけど」

そんなことかよ。って突っ込みたいが、協力者だから言うわけにはいかない。容姿はともかく、ゲームの中で性格まで変わるわけがない。確かに、実際に会ってみると全然想像と違った人もいるみたいだが、俺は珍しい部類に入るのか、ネットでも現実でも案外そのまんまだったりする。

「じゃあ、先に最近の2人の状況を教えてくれると嬉しいんですが」「そうねえ……確か先週会ったって言ってた」

先週とは随分最近の話じゃないか。それにしても、未だにその関係を続けているなんてな。

予想通りというか、なんというか。

「何か連絡がいきなりきて、泊まりにこない？ って感じだったらいいよ。真美もやめればいいのね……」

「……なるほど」

ミィアさんも辛そうな顔をしている。そうか、きっと真美の友人

である人たちはきつとみんなこういう思いなんだろうな。誰しもが真美を楽にしてあげたいって願っているんだ。

それから色々な話を聞いた。付き合っていたのはいつからなのか、どういうカップルであつたのか。だが、やっぱり俺も気が乗らない。真美も俺に知られたくないことだつてあるだろう

に、俺は仕事という口実で真美や、そのときのことを聞いている。胸が苦しくてしょうがない。

「その辺で、大丈夫です」

「そう？ あ、後連絡先だったかな？ ちょっと待って」

ミィアさんはバッグの中から携帯を取り出して、メモリの中を探しているようだ。

「あー、結構昔に入れたやつだなあ。もしかしたら番号変わってるかもしれない」

「全然構いません」

「メールのアドレスは変えましたーとかで、知ってるんだけどねえ。一応インテンスに番号教

えたつていう連絡しておくね」

「はい、ありがとうございます。あ、もし何かあったらここに連絡してください」

俺は名刺いれから、名刺を取り出しミィアさんに渡す。

「ほうげつか？ 探偵事務所」

「名前だけ見ると弁護士事務所みたいですけど、一応探偵事務所なんです」

「あはは！ そうだね。うん、分かった。何かあれば連絡する」
依頼主への掴みではなくて、こんなところで使うなんてな。

ミィアさんに礼を言くと、俺はとりあえず事務所へ帰ることにした。

事務所のデスクに座りタバコを吹かす。いつもなら、このゆつくりと流れる時間が嫌いではないのだが、今日に限っては心苦しく感じる。早くこの依頼を終えたいと思うのと、俺は本当に真美のために動いているのだろうか。ということ。それと、マスターに言われた湊のこと。

湊がどこまで不安であるのか俺には分かっては居ない。それが何に対して不安に思っているのか。あいつも結局自分では語らない性分であるから、聞き出さないとならないわけだが。そう素直に話してくれるものだろうか。

ガチャっと、ドアの開く音が聞こえる。ドアに隠れながら見ているのだろうが、こんなことをするのはひとりしかない。

「何してんだ湊」

「べ、別に何でもないわよ。依頼の方はどうなのかなって思っただけ」

強い口調でそうは言ってくるが、やっぱり表情は明るくはない。マスターが言っていた通りなのかもしれない。

湊は応接用の椅子にちょこんと座ると、そのまま黙る。

「どうした？ 元気ないじゃないか」

「心さ」

「ん？ 何だ改まって」

「自分あんまり犠牲にしないでねって、前言ったじゃない」

そういえば、そんなこと言われたことがあるな。そのときは湊を庇って大怪我したっけか。

「ああ、そう言われてから無理しないようにしてるよ」

「本当に？ じゃあ、何で今回の依頼受けたの？」

「それは……」

真美のために。そう俺は思っている。

「多分、今回の依頼……どう考えているのか聞いたら、心はもつと苦しむと思う。真美さんが

聞いたのと同じくらい苦しむと思う。……心から真美さんへ伝えるのと、真美さんが直接聞く

の、どっちが真美さん辛いと思う？」

「そりゃ、当の本人のほうが……」

「そんなわけじゃない！」

いきなり立ち上がって、大きな声を出す湊。俺は驚いて、咥えたタバコがそのままになっていた。

「自分でかかえこんで、人に言わないで！ それじゃ昔のままの心のままじゃない……！ ……」

…心は優しすぎるよ。人の悩みでも、結局心も辛くて苦しくなるんでしょ……？」

気付いてたのかこいつ。俺が人の悩みを聞いているときや、人が辛いつて思っている話を聞

いているときに、胸が苦しくなるのを。

忙しい時期がくれば確かに、多少はやわらいでいく。でも、それがどういいうものであれ、ど

うすればいいのか、という思考が止まることはない。それが真美を見守ると決めたとしても。

湊は泣いているのか、こっちに顔を向けることはない。でも、あいつがあんな風に思ってい

たなんて、思ってもみなかった。というか、ここまで俺のことを分かっていたなんて。

「すまなかった。お前がそこまで俺のこと分かったたなんてな」

「……そりゃそうよ、ここ数年で毎日一緒にいるんだもの」

「それとありがとう。大丈夫だ、前の俺には戻らないさ」

「うん……」

そのときだ、俺の携帯へメールの着信が届いた。

「メール？ 誰から……。ミイアさんからだ」

メールの本文にはこう書いてあった。

【教えたって連絡したら、それならいちいち連絡させるのも手間だから明日の13時に草木公園

でどう？ って言われちゃったよ。大丈夫だと思うーって返しておいたから、明日の13時に行

ってみてね☆】

明日の13時か。草木そうぎっていえば、俺の原付で20分くらい行った場所にあるはずだ。

そうか、今は向こうにいる住んでるわけか。こりゃ予想より早くかたがつきそうだな。

「どうするの？」

やっぱり泣いていたんだろう。目の周りが赤い。それでも、それを隠しておきたいのだろう。

俺の携帯を覗きながらいつも通りに聞いてくる。

「いくさ。これが依頼だからな」

「そうだね」

そういうと、久々に湊は笑顔を見せた。いつもは仏頂面で笑いもしないんだがな。やっぱり

笑うと可愛いやつだ。元々の見た目はいいのだし、もっと笑えばいいんだがな。

「それじゃ、部屋戻るね」

「ああ。俺は真美に連絡しておく」

湊がドアを閉めるのを待ってから、俺は携帯から真美の連絡先を探して、電話をする。

「もしもし？」

「俺だ。一応報告の電話をしようと思ってな」

「そかそか。……それで、どうなったの？」

「明日、会ってくるよ」

そういうと、真美は無言になる。どういう表情をしているのだろうか。あの曇った顔である

うか、それは電話ごしには分からない。

「うん……」

そう返事をするともた無言になる。

長い沈黙。今まで真美と話しててこういうことがあったろうか。

その沈黙は凄く長く感じる

が、実際は30秒程度だったようだ。

「ねえ……?」

「どうした?」

「いつそのこと、私たちが……」

「それ以上いうな」

俺は真美が言おうとしていた台詞をさえぎるよう、口調を強めに答えた。

「もし、お前がそれを言い切ったら、俺はそれを承諾するよ。それは真美も分かってるはずだ。

でも、そうなった場合、お前は余計に辛くなるんじゃないか? お

前は前に言い切ったな、俺

のことは好きにはならないって。俺も恋愛感情はない。嫌いではないが、そういうのじゃない

のは、真美も分かってるはずだ」

「……ごめん……もう、切るね……」

「謝らんでいい、ゆっくり今は休め」

「うん……それじゃね」

どうしたらいいのかが分からなくなるのは、あの時の俺もそうだったな。今度は俺が救ってやる番なのかもしれない。

流石に公園っていうのも暑いもんだ。周りに木があつて所々に木陰はあるが、それでは暑さはしのげない。しかし、公園で遊んでいる子供たちは元気だったりするのだが。

時計を見るともうすぐで13時。公園のこの広場で待ち合わせっていうことだったが、いったいどういう人なんだろうか。真美の元彼というのは。

「あなたが、探偵さん？」

ふいに後ろから声をかけられ、俺が振り返るとそこにはひとりの男性がいた。

「はい、探偵の皆代です。事情は……」

「大丈夫、あいつから聞いてるよ」

あいつ、ミアさんのことか。

「じゃあ、簡潔に話します。真美から、あなたが何を考えているのか調べて欲しいと依頼されたので、聞きにきました」

少しの沈黙が広がる。聞こえるのは、公園で遊んでいる子供の声。

「言ったのは真美に伝わるわけだね？」

「そうですね、報告しないといけませんから」

「それもそうだな。でも、それなら君が真美の彼氏になればいいじゃないか」

俺が真美の彼氏に、か。簡単に言ってくれるな。それが出来れば簡単な話だ。こんな依頼も

来なかっただろうし、真美があんなに辛い思いをしなくてすんでいた。しかし、それは絶対にないことだ。だからこの依頼がきて、俺が調べている。

「それは無理な話です。……俺は真美を恋愛の対象とは見れませんから。俺も昔色々ありまして……今は面倒を見なくちゃいけない奴がいるので」

「……そうか。分かった。俺は――」

俺が思っていた返事が返ってきてくれるのが一番嬉しい。だが、そうとは限らない可能性のほうが大きいだろう。しかし俺は。

「……待ってください」

何故か、話そうとしていたのを止めていた。

「やっぱり……話さなくていいです。やっぱりこれは、真美とあなたの問題だ」

「でも、それが君の仕事なんだろう？ それなら……」

「真美に言われたんです。探偵である俺、友人である俺、両方に依頼を頼むと」

「……」

「友人の俺として、やっぱり聞かないでおきます。報告は……失敗したと、そう伝えておきます」

「そうか。君がそういうなら……」

「暑い中、こういう場所を設けてもらって、ありがとうございます。――それでは」

俺はそれだけいうと、そこから立ち去ろうとしたが、1個だけ言い忘れていたことがあり、振り返る。

「最後に1個だけ、真美の友人の俺として言っておきたいことがあります」

「……」

「俺は……俺は真美を幸せには出来ません。先ほど話した事情があるので、することが出来ません。だからこそ俺は……真美が幸せになってくれることを本気で願ってるし、思っています。」

……言いたかったのは、それだけです」

それだけいうと一礼をして、その場を立ち去った。

二日連続の喫茶店『ジャンボリー』。俺はここで真美に報告するために、仕事が終わったらくるように連絡をした。

カランカランと、空いている店内に響く音がすると、スーツ姿のままの真美がカウンターで座っている俺の隣に座る。

「やっほー」

「やっほー」

互いにそこまで声が張れていないのが分かる。真美は報告がどういうものか考えていたのだろう。

「で、報告だが……」

「……うん」

「失敗した。何を考えているのかを聞かなかった」

「聞かなかった……って？」

「友人としても、そう真美が言ったからな。友人としての俺が最後に出てきた」

「そっか」

多少明るい表情をしているが、少し曇り気味でもある。これだけでは、依頼が失敗だったことが残念に思っているのが分からない。

「100%探偵としての依頼であつたら、きっと聞いてきたと思う。100%友人であつたら、俺は依頼を受けてはいなかったと思う」

「……」

「すまん、こんな結果になつて」

「ううん、大丈夫」

真美は笑顔のままだ。でも、瞳は悲しい感じはしない。

「もしかしたら、そういう結果を望んでいたのかも」

「……そうか」

マスターは無言で真美にコーヒーを差し出すと、会釈をして一口飲む。

「あったかい。夏なんだけどね」

笑顔で話している真美。それを見ている俺は、意外にも胸が苦しくはならなかった。

これで良かった、そう言いたそうな顔を真美はしている。俺もその方が良かったと思っていたのかもしれない。

「ねえ」

「ん？ 何だ？」

「今度また事務所にいったいい？ 依頼じゃなくて……今度は遊びに」

「ああ、構わんよ。湊も喜ぶだろうさ」

「うん！」

真美の本当の笑顔も久々に見たな。でも、これからどうするのかは真美次第だ。俺が出来る限りのことはした。だから、今くらいは友人の笑顔をゆっくり見ても誰も怒りはしないだろう。

事務所へ帰ると湊がパソコンデスクに座りながら何かをしていた。近寄ってみてみると、俺

がやっているネットゲームをやっているようだ。

「あ、おかえりー」

「ただいま。なんだ、気になってやってるのか？」

「結構面白いのねえ、ネットゲームって。試しに心のキャラで遊んでるんだけどさあ」

おい、今なんて言った。

「なーんか、うざったいのよね。ストーカーみたいな奴いるし」

いったい何をしたんだ、俺のキャラを使って。

「え？ いやあ、女子高生だって話しかけた人に言っただけよ」
最悪だ。俺のキャラ丸つぶれじゃねえか。どうしようにも、ここまで信じるやつがいるとは
な。パソコンの画面を見てると凄い人気っぷりだ。

「まあ、いいわ。今度は自分でキャラ作って遊んでみよつと。それで……依頼と報告はどうだったの？」

「依頼は失敗した。そう真美にも伝えた」

「そっか……。それで良かったの？」

「ああ、俺も真美もきつとその方がいいって思ったからそうした」
「そっかそっか……」

何だか少し嬉しそうな、それとも悲しいのか良く分からない表情をしている湊。いったいど

うしたんだろうか。また俺が何かをしたんだろうか。

「おい、どうしたんだ？」

「心、お給料来月2割カットね」

おいおい、いったいそれはどこから出てきたんでしょか。

「依頼は一応失敗ってことだからね。前に決めたわよねえ。失敗したら？」

「給料2割カット……」

そういえば、最初にそういう約束がされていた気がする。最近は失敗をしたことがなかったから随分と忘れていたが。そうか、さっきの表情はこの表情だったのか。流石所長殿としか言いようがない。

でもま、湊も元気になったようだし、それはそれでいいのかもしれない。

そう、俺はずっと真美のそばにいられるわけじゃないし、とある領域を越える事は一生ない

だろう。でも、友人という位置までの絆で繋がれているということ
っていうのは――男女の友

情なんて、とか考える人間もいるかもしれないが、俺らにはそれが
成り立っている――その信

頼がなくなることでも一生ないのだと思う。最初に話したように、根
拠は何だと聞かれれば、そ

れは俺にはわからない。俺が真美にそう言ったときに、真美も同じ
感じがすると言ってたから、

前世で何かがあったのかもしれないし、そうでないかもしれない。
互いがなんとなく付き合い

が長くなるだろうという気だけなのだ。俺が思っていることは元彼
にあったときの台詞に込め

てきた。あんな歯が浮くような台詞は本人なんかには言えないが、
あれが俺の本心でもある。

だから俺は、きつとこれから先も真美の力になるために出来る限り
のことをしたいと思ってい

る。お前が幸せになるまでは。

これも面と向かっては言えないが、ここでならいいだろう。

今までありがとう。そして、これから先もよろしく。

エピソード3「思い出」

▼1

”思い出”というのは綺麗なものとか言うけれど、思い出なんて儚いものでしかない。って私は思う。

その日の天気予報では夕立は降らないって言ってたのに、凄雨がああとき降っていたことは今も忘れない。

私は嫌になりながらも鞆を傘代わりにして走りながら帰路についていた。もうなりふり構ってられない。

学校では服を乱さないようにとか、もっと静かに歩きなさいとか、そんなことを言われるけど。私からしたら堅苦しいことこの上ない。でも、せっかく父さんが入れてくれた”聖稜華女子学園”だから、我慢してでも行ってる。みんな友達はおしとやかなお嬢様だったりするから、私とは合わないって思っていたけど、そういうこともなかった。――ひとりだけ私に近い友達がいるけどね。

その学校へ行かせてくれた父さんがいなくなって1年。母さんと2人きりの家。誰もいない探偵事務所。とても広く感じる。だからなんだろうか、母さんも私も、用事がないとき以外は事務所のほうにはいなかった。普段通り優しく、綺麗な母さんだけど、寂しいんだろうな。

家の近くにある公園に差し掛かったとき、ベンチに座っている男の人がいた。いつもなら気

にも止まらないと思う。ましては可愛い子犬や子猫がダンボールに入られて可哀想な雰囲気を出しているわけでもない。ただその男の人は、傘もささず雨にさらされながら、火がついていないタバコを咥えたまま項垂れていた。

考えるよりも先に、足が男の人の前へと進む。よく見ると、20代前半なのかな。まだ若い気がする。怖いという感情は何故か出てこなかった。それとは違う何かをこの人には感じていた。

「何してるのよ？」

自然に言葉が出てくる。

私が目の前にいることが分かったのか、顔を上げて私を見上げる形になった。何だろう、凄い悲しい瞳をしている。何かがあったのだろうか。

何をしているのか聞いても男の人はそれに答えなかった。そしてしばらく沈黙が続き、私が次に言った言葉は。

「家が近いから、一緒に来なさい」
だった。

”思い出”は綺麗なものの、なんて言う奴がいる。そんなもんは俺からしたら、必要のないものだった。

あの日は凄い雨が降っていたことを俺は絶対に忘れることはない

だろう。

高校を卒業して、短大に行き、普通に就職した俺。でも、人間関係を深くは持ちたくはなかった。その方が楽だったし、感情をそこまで持つ必要がなかった。いつか別れがきて、辛い思いをするくらいなら、そんなものはない方がいいと思っていた。

でも、真美と会ってから全てが変わった。俺が思っているよりも、みんなは俺を認めてくれ

るし、慕ってくれていた。それに、そんな人生がそのまま進めばきっと楽しくはないということが分かった。

しかし、この日の俺へ来た電話はまた最悪の状況まで追い込んだ。「皆代さん、お電話です。何か病院からみたいですけど」

「はい、分かりました。……はい、皆代です。はい、俺ですけど……」

その電話は、俺の母親が事故で死んだという連絡だった。

今まで父親がいないことに違和感を感じなかった。そういうイジメが学生時代にある人間も

いるようだが、俺にはそういうことがなかった。それに、母親一人で俺を育ててくれたことを

感謝していた。そう、たったひとりの家族だった。そんな母親が死んだんだ。

それから俺の記憶は定かではない。親戚から電話がかかってきていたのは分かる。俺にはそ

ういう資金がないから、葬式とかそういうのは親戚でやってくれるということ saying 言ったのだ

と思う。でも、俺にはそんなことはどうでも良かった。

次の日俺は会社を辞めた。もう全てがどうでも良かったからだ。カウンセラーになったあい

つ、真美からもメールや電話が何度もあったが、それもどうでも良

かった。

気付いた時には大雨の中、公園のベンチで座っていた。涙は出てない。悲しいはずなのに、寂しいはずであるのに、涙が出てこなかった。何かを考えるわけでもないのに、火のつくはずのないタバコを咥えたまま俺は座ったままだった。

「何してるのよ？」

聞こえてきた声に反応して、俺は顔を上げる。目の前に立っているのは制服を着ていた。近

くにある学校の生徒であることは間違いなさそうだ。しかも、制服を着ているということは中学生よりも上ということ。こんな公園で雨にさらされながらいる男に近寄ってくるなんて、どんな物好きなんだろう。でも、分からないがこの少女には不思議な感じがする。

何だかんだで俺は余裕があるようだ。しかし、それに答える気力はなかった。そして、少女が俺に言った言葉は。

「家が近いから、一緒に来なさい」
だった。

▼2

俺が通された部屋はひとつの事務所のような場所であった。大きなデスクが部屋の奥に置いてあり、そこにはパソコンが置いてある。部屋の真ん中にはテーブルと、両側にはソファ。事

務所のようなというよりも、事務所なんだろう。しかし、しばらく人が使っている気配もない。

そのわりには埃もなく、きちんと掃除がされているようだが。

「そら、これで身体拭きなさい」

投げ渡されたバスタオルを、俺は手に持ったまま動かない。何でこいつは俺にここまでのことをするのだろうか。

俺が可哀想に見えたから？

いいや、何かが違う気がする。

「何突っ立ってんのよ。さっさと拭きなさいって。私は代わりの服探してくるから」

そういつて少女は、事務所の隣の部屋へと入っていった。

言われたとおり、タオルで髪や身体を拭く。拭きながらデスクの横にあった棚をしてみる。

大きな棚にはファイルがいくつも入っており、そこには一つ一つファイルの名前が入っている。

「浮気調査……事件……」

ファイルの名前だけを見ると、少しだけおかしい。流石に棚の扉には鍵が掛かっており、ファイルの中身を見ることはできない。しかし、このファイル名を見る限りこの事務所を使って

いたのは――。

「服テーブルに置いておくから」

それほど真剣に見ていたのだろうか。少女が部屋に入ってきたことを気付かずに居た。

テーブルに置かれた服は男性物のようだ。この少女の父親の服だろうか。

「身体拭いたなら、とりあえず着替えなさい。服が乾くまでいたらいいわ」

「……お前は何で俺にここまでのことをするんだ？」

少女に向けて初めて発した言葉がそれだった。

いくら考えても分からない。どうしてここまでのことをするのか。

少女は別に困った様子もなく、今まで俺に話しかけてたように凛とした態度のまま答える。

「何となくよ。理由が必要？」

堂々とそう言われてしまうと言い返せないのも事実だ。

俺は言われた通りに渡されたものに着替える。そういえば、今何時なんだろうか。

会社に辞表を提出して、出てきたのが昼より前だったのは覚えている。しかし、あの公園に

どうやっていったのか、そしてあの公園にどのくらいの時間いたのか自分では分かつては居ない。

それだけ自分にとってきつい出来事だったんだろうな――。

がちやり、と不意に扉の開く音がする。そこに立っていたのは、一人の女性だった。ウェー

ブが掛かった長い髪を束ねて、スーツを着ている。

「あら湊、お客さん？」

『湊』というのは、この少女の名前だろうか。それにしても、この女性は湊と呼ばれた少女

とどういう関係なんだろうか。姉妹だと言っても見た目からは、納得してしまいそうだが何か

違う気もする。綺麗であり、可愛いといっても良い容姿。流石に年齢までは予想する事は出来ない。

「お母さん帰ってたんだ。うん、ちょっとね」

予想外の展開だな。まだ年齢の近い親戚の従姉とかなら分かるが、母親とは。

何だろうか、少女の母親はやけに俺を見ている気がする。

「夕飯は今日お母さんが作ろうかな♪ 3人分でもいい？」

「うん、ありがとうお母さん」

3人分？ 兄弟がいなくて、3人家族であるなら普通だが、いちいち3人分という必要があるのだろうか。

それだけ言うと少女の母親は戻って行った。

「お父さんいないのよ」

俺が考えていたことを察したのかのように話しかけてくる。

「ここ探偵事務所で、お父さんがやってたんだけど――」

そこまで言うとき少女の表情が曇ってくる。

「ある事件を捜査中に行方不明になって、もう1年経つよ。数ヶ月いなくなったりするのは

今まであったから、心配にもならなかったんだけどね。でも、流石におかしいって私もお母さん

も気付いてる。だけど守らないといけないのよ、ここを」

ただの変な女子高生だと思っていたが、色々事情があるようだ。

だからといって、ここに長

居するわけにも行かない。服が乾いたらお暇させてもらおう。

そう考えていたときだ、携帯の着信音だろうか突然この拾い部屋に響き渡る。

「もしもし。うん、ごめんまだちょっと分からないんだ……」

少女の携帯が鳴ったようだ。一体何の話をしているのだろうか。

「うん、分かったらちゃんと教えるから安心して。うん、それじゃあまたね」

電話が終わると、少女はため息をする。一体何があったのだろうか。

「……何かしてるのか？」

「え？ いや別に――」

「その割には、手詰まりしてそうか顔してる。ここまでやってもら

った礼に手伝ってやるよ」

少女は驚いた顔をしている。そらそうか、今まで意気消沈していた人間がこうやって動こうとしているのだから。でも、ここまでしてもらって何もしないんじゃない。無礼にもほどがあるだろう。そう思ったからだ。

▼3

「元々はここへの書き込みが原因なのよ」

少女が携帯のディスプレイを見せる。そこには「聖稜華女子学園高等部裏掲示板」とある。

最近ニュースとかで取り上げられている、学校の裏サイトだろうか。結構どこにでもこういうのはあるみたいだ。それにしても、書き込みが少ない。そういう印象を与えられる。普通なら学校の生徒がほとんど見ていて、書き込みが凄いイメージがあったのだが。

「随分書き込みが少ないんだな。こういうものなのか？」

書き込み数を見て率直な感想を言ってみる。

「聖稜華女子学園って、流石に名前だけは知ってるでしょう？ お嬢様中のお嬢様が行くって

言われてる学校。そんな学校で、こういうのを知ってる方が少ないのよ。基本的に自分のこと

なんて人がやってくれるようなものなんだから」

なるほど、言われてみればそうかもしれない。お嬢様っていうのは、やっぱり思っているよ

うなイメージのままのようだ。確かにやけに機械に詳しいお嬢様とか、庶民的過ぎるお嬢様っ

ていうのもあまり思いつかない。まあ、この少女は非常に親近感が沸くが。

「それで、問題の書き込みってのは？」

「これ」

スクロールするまでもないのか、すぐ見えている書き込みを指差す少女。

そこには、こう書かれている。

『藤川咲はすぐに人を裏切る』

彼女のせいで壊された人間関係はたくさんあるからみんな氣をつけて

話しかけられて人間関係壊されないようにね』

こんな内容。何か少し違和感を感じるのは気のせいだろうか。

「咲ちゃんは、友達から聞いてこれを見たらしいんだけど……」

「周りの人の誰かが書いたって思ったら不安になるだろうな。人を疑いざる終えない。でも、

何でお前に相談してきたんだ？」

「調度その書き込みを教えてくれた人が来たときに、私と一緒に喋ってたのよ。それで一緒に

その書き込みをみて、咲ちゃんの表情が何とも言えないものになったから——」

「何とかしてやるって言ったのか」

後先考えないというか、何というか。もし、自分が疑われていたらどうするつもりだったの

だろうか。まあ、そうならその藤川さんとやらもお願いしなかっただろう。それだけこの少女は周りから信頼されているんだろう。

「それでお前がしたことは？」

「……何も出来るわけじゃない。手がかりはその書き込みだけなんだから」

それもそうか。匿名性が強いこういう掲示板に書き込むというこ

とは、書き込んだ人間は相

当自信があって書き込んでいるに違いない。しかし、こうやって見ると女同志のいじめとかつていうのは怖いとしか言いようがない。まあ、最近の若者全員がこういう陰湿なものになって

いるというのも事実なんだろうが。でも、この書き込みしか手がかりがないというなら、この書き込みが示している事から進めることもある。

「その子どういう子なんだ？」

「咲ちゃん？ えっと、確か藤川不動産の社長の娘だったかな」

おいおい、藤川不動産って全国に名が知られている不動産屋じゃないか。確か俺が一人暮らしするときも行った気がする。

「典型的なお嬢様で、物腰が低くて言葉が丁寧で。でも、ちょっと不器用というか自分の意見を言えない子かな」

改めて聖稜華女子学園というものの凄さを知った気がする。

「お前は彼女がそういうことは絶対しないって根拠があるんだな？」

「だって、咲ちゃんは私が聖稜華に来たときからずっと仲良くしてもらっているし……。咲ち

やんのせいで何かが壊れるなんて、今までなかったから」

「なるほどね。……ふむ」

それをやっても、何の影響もなく、それでいて怪しまれない人物か。

「なあ、その子と話が出来るか？」

「え？ でも、いきなり話したら――」

「ここ探偵事務所なんだろ。雇ってる探偵が手伝ってくれるって言うてくれたって言えばそこまで怪しまれないと思うがな」

「……そうね。分かった」

「その前にお前の名前は”湊”でいいんだよね？」

「うん、そうだけど、何で——」

「お前の母親がそう呼んでたからな」

「そっか」

湊は藤川さんに電話をかけ始める。そして、さっき言ってたことをそのまま言う俺へ携帯を渡す。

「代わりました、湊さんの事務所でお仕事をさせていただいてる探偵の皆代 心といいます」

「はい……」

随分声に力がない。それほど悩んでいるのだろう。

「聞きたいことがあるので、いいですか？」

「……私に答えられることなら」

俺が疑問に思っている点は1個だけ。でも、今から聞くことを肯定してくれるなら、そこからの疑問が2つ。

「まず、あの書き込みの件のような話をしたことがありますか？」

誰かを裏切るとか、信じる

とか。気軽に話したことでも構いません」

「えっと……確かいたような気がします」

よし、これならそのまま疑問をぶつけることが出来る。

「それを話していたときにその場に誰がいました？ 俺に言っても分からないとお思いでしょ」

うが、名前を挙げていただけるとありがたいです」

「確かそのときは、法月華さんと杉並さん、それに武田さんと一緒にそのときは談笑をしてました」

談笑ってあんまり言わないと思うが、そこで気にしたらいけないところなんだろう。俺はメ

モを取りながら電話を進める。

「最後に、その書き込みを教えてくれたのは誰ですか？」

「あの時は凄い勢いで武田さんが走ってきて教えてくれたんです。でも、私こういう掲示板が

あるのを知りませんでしたので、言われるまで気付きも……」

「分かりました。また何か分かったら湊さんから連絡させますので」

「はい、お願いします……」

そういうと藤川さんから電話を切った。

「お前に聞きたいこともいくつかある」

「……思っただけど、お前ってやめてくれる？ 名前が分かったんだから名前で呼びなさいよ」

一体何かと思ったが、そういうことか。でも、今日初めて会った人間を呼び捨てにするのも、年下なのが分かっているのに”さん付け”するのもいかなものだろうか。

「湊、でいいわよ」

本人がそれでいいと言うなら。

「それじゃ、湊にも聞きたいことがある。最初にこの聞いた苗字が誰か教えてくれ。法月華に

杉並、武田っていう苗字」

「法月華は私よ。杉並っていうのは、杉並優莉っていう小学校からの私の親友。武田っていう

のは武田美亜子っていう藤川さんの親友みたいなもの」

「4人でいつもつるんでるのか？」

「んー、どっちかというと私は優莉といつもいるけど、藤川さんは顔が広いから常に誰かとい
るし……あれ」

湊は何か気付いたのか、少し考える素振りになる。

「武田さんって今思えば、藤川さんにいつもくっついていってるイ

メージがある」

「くつついていつてるってどういうことだ？」

「私や優莉のように、気付いたら一緒に騒いでるって感じじゃなくて、藤川さんの後を武田さんが追いかけてるみたいな」

学校生活っていうのは、意外と起こっていることが自然に見えても、よくよく考えてみると

こうやって何となく違和感があることに気付いたりするものだ。まあ、そんなことやってたか

ら俺はまともなガキじゃなかったんだろうな。

それにしても優莉って奴は、一緒に騒いでるって一体どういう奴なんだろうか。

「待って、それだったら書き込んだのって——」

「そのまさかだ。書き込んだのは武田さんっていうやつだろうな」

「でもなんで武田さんがそんなことしなくちゃいけないの!？」

「俺が今から話すのは憶測でしかない。それに状況証拠や湊たちの証言しかないということは、

やった本人がやってないと言い張ればそれで終わる。それを覚悟して聞け」

湊はゆっくりと頷くと、俺の前にあるソファに腰をかける。

俺の考えはこうだ。いつも仲良く一緒にいる藤川さんは、いつも誰かと一緒にいて楽しそう

に話をしている。でも、武田さんは違った。まあ、よく言う独占欲というやつだな。自分以外

の誰かと話している藤川さんを見て、嫉妬する。それが溜まりに溜まって——。

「まあ、こういう行動を起こしちゃったってことだな」

「言われてみれば、私たちが藤川さんと話してるときって、武田さん何だか楽しそうじゃなかったかもしれない……」

「これを藤川さんに言うか言わないかは……湊、お前の勝手だ。結局こういうのはなるようにしかならん」

「……………」

携帯電話を持ったまま湊は固まったままになってしまった。でも、こういうのを何とかするのは結局当事者しか出来ないこと。もし、それを自分がやったと白状して関係が壊れてしまっただとしても、それはやってみないと分からないこと。藤川さんが武田さんの考えを聞いて、理解してくれるか。それに、こういうのは結局互いに言い合わないと分からないもんだしな。

▼4

結局湊の頼まれごとを手伝っていたら、夕飯に呼ばれてしまった。部屋へ呼びに来た湊の母親は、湊の表情を見て俺だけを先に居間へと連れて行った。流石母親というところなんだろう。表情をただけでそういうことを理解できるのだから。――母親か。

しばらくして、湊も合流して夕飯の時間になった。

「そういえば、お名前伺ってなかったわね」

「あ……皆代心です」

「心くん♪ 良い名前ねえ。気付いてるだろうけど、私は湊のお母さんの美奈っていうの。よろしくね」

可愛らしい笑顔で話しかけてくる。スーツから私服に着替えたのだろう。湊の母親――美奈

さんはまた随分と若く見える。この人いくつで湊を生んだんだろうか。

「お仕事は？」

「……今日辞めてきました」

「あらあら……」

湊は黙々と夕飯を食べている。俺の一言で空気が悪くなるだろうな。

「だったら、ここで探偵として働きなさいよ」

湊が口にしたものを飲み込んで言い放ったのは、そんな台詞だった。

「あら、良い考えねえ！」

「でしょ？ さっき手伝ってもらったけど、中々できるもんじゃないわ。あんた前の仕事も探偵とかだったの？」

「いや……普通の営業だけ。たまに、同僚とか上司に浮気調査とか不倫調査とか分からないけど、

けど頼まれてたり、小さいものをなくしたとかで相談されたり——」

その所為で仕事にならなかったことも多々ある。浮気とか不倫調査なんて、流石に外まで持

ち込むことじゃないから、ただ社内で行動を注意して見てたり、当事者に話を聞いてどうにか

した程度でしかない。なくしものに至っては、話を聞いてその人の行動した場所でしそうなこ

とを想定して、ここじゃないかと予想を立てたり。今思えば違う部署の人とかまで俺の噂を聞

いて頼みに来ていたりもしたけど。

「上等よ。明日から荷物運んでここで住み込みで働きなさい」

「それがいいわぁ。男手がなくて大変だったものねえ」

何なんだこの親子は。不信心とか全然ないんだろうか。拾ってき
た俺をこうして面倒を見よ

うだなんて正気とも思えない。

しかし、結局言いくるめられてしまう俺も俺か。

事務所の奥にある書斎に立ち尽くす俺。どんどん話を進められ、今日からここが俺の部屋だ

とか言われ通された。

「おかしいと思うでしょ？　ここまですることに」

「……当たり前だ」

「でも、伊達に探偵の妻じゃないのよ、うちのお母さんは。多分、あんたに色々あったって、

あの話だけである程度想定ついてるんだと思う。それにその探偵の娘である私もね」

「……聞かないのか？」

「別に、話したくなかったら話すでしょ？　無理に聞く気はないわ。

とりあえずゆっくり休みな

さい。何だかんだであんた——」

「心だ」

名前で呼べって言われたのを気にしていたわけじゃない。何となく、そう返したくなった。

「心だって気持ち的に落ち着いてないでしょ」

「すまん、色々」

「いいのよ。あ、そうだ。1個だけ言っておくわ」

書斎から出ようとしていた湊はドアを開けてから、こちらを振り向く。

「あんたは、独りじゃないわ。その辞めた会社だって、それに友人関係であつてもね。はい、これ」

湊は俺に物を投げてくる。見た感じ機械に見える。落としちゃいけないと、しっかりキャッチするとそれは、俺の携帯電話だった。

「頻繁に震えてたわよ。誰かから連絡が来てたんじゃない？ それじゃ、また明日ね」

そういうと湊は書斎から出て行った。

言われた通り携帯を開くと、着信とメールが、いつもこんなに来るはずもない数きていた。

その中でも2人の名前が目立つ。『樺田真美』と『吉澤尚哉』の2人。着信には尚哉の名前。

メールはほとんど真美の名前だった。

留守番電話には「大丈夫か？ 生きてるか？」という尚哉の声。メールには「大丈夫？ 何かあったら話聞くよ？」という真美の文面。

湊に言われた「あんたは、独りじゃないわ」という台詞。あいつは俺が何かを話したわけじゃないのに察した。俺がそういう表情をしていたからだだろうか。何だか止まっていたものが、湊のお陰で進み始めた気がする。

無茶苦茶な出来事から始まったあの日。湊との出会い。そして、これが探偵をするきっかけになった出来事だ。

あのとき、湊と出会ってなかったら俺はいつたいどうしていたのだろうか。自暴自棄で、あ

のままのたれ死んでただろうか。それとも自殺までしてただろうか。そんなことは分らない。

今現在こうして俺は探偵を続けている。あの時こうしていたら、そんなことを考えるのは野暮というものだろう。

独りだと感じるのは、誰にでもある。だったら誰とも関わらなければいい。そう思うときも

ある。でも、結局俺を戻してくれるのはこうした親しい友人や傍にいる人なんだ。

ちなみに、あの時解決した書き込みの出来事は、藤川さんには言わなかったようだ。湊が説

得したらしい。あれから、書き込みの影響が周りに出ることもなかったらしい。ひとつ変わった

たのは、湊は武田さんとも仲良くなったということ。武田さんも孤独に感じていただけなんだ

ろう。実際にどうなったかは見ていないから分からないが、きっとそうだったのだろうと思う。

孤独に感じるとき、意外と近くにあなたが必要としている人がいる。必要なときに何もしてくれていないんじゃない。そこに居てくれるだけで、本当は良かったりする。

それに気付かせてくれるのも、きっと身近な誰かなんだ。ありがとう、いつも傍にいてくれて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5884g/>

daily life

2010年12月10日02時46分発行